

# 呂振飛の前半生について

滝野 邦雄

## はじめに

史可法（字は憲之，号は道隣。順天大興の籍，河南祥符の人。萬曆三十年十一月十四日（西曆一六〇二年十二月二十六日）～弘光元年四月二十五日（西曆一六四五年五月二十日）。崇禎元年戊辰科（一六二八）三甲二十六名の進士）によると，明末清初の中国北中部は，

闖賊 關に入りてより以後，安民（人々を安撫する）に假借（假托）し，海内を煽動す。偽官 <sup>ひと</sup>一たび到れば，争いて奉迎を思う。甚だしきは，督撫 手づから兵權を握るも，<sup>ひと</sup>一つの偽牌を碎く・<sup>ひと</sup>一りの偽官を斬る能わず。人心の壞<sup>こわ</sup>るること，此に至りて極まれり（史可法「請旌淮人忠義疏」）。

という状況であった。ところが，租米の中継地として重視された淮安のみは，固守されたという。

惟だ淮安のみ官民 固守する有り。偽牌 到れば之を碎き，偽使 到れば之を斬る。賊 河上に逼れば則ち邀撃して之を敗退す。賊將の董學禮・白邦政等の如きは，皆な躑躅（うろうろする）して敢えて前まず。民間の義兵 集りて一二十萬に至り，聲勢の壯なること長城の如し（史可法「請旌淮人忠義疏」）。

この治安維持の中心となったのが漕運総督として淮安に駐在していた路振飛（明・萬曆十八年九月二十五日（西曆：一五九〇年十月二十三日）～清・順治六年四月二十二日（西曆：一六四九年六月一日）。天啓五年乙丑科（一六二五）三甲二十九名の進士；崇禎十六年八月二日に鳳陽巡撫となり，崇禎十七年三月九日から漕運総督を兼務）である。路振飛がどのように義兵を組織して淮安を守ったかは，崇禎十七年正月から六月までの淮安で起こったことを記した徐天明（字は無功）の『淮城日記』に詳しく紹介されている。

本稿では，路振飛がどのように淮安の治安を維持したかを考える前段階として，路振飛の漕運総督着任前までの経歴を検討してみるつもりである。そうすることで，路振飛が淮安でとった政策は，それまでの地方官としての経験から導き出されたものであることが理解できるのではないかと考えている。

路振飛の生涯について，郷里である曲周縣で編纂された順治『曲周縣 <sup>ママ</sup>誌』では，つぎのように伝える。

路振飛，號は皓月，天啓甲子科〔の舉人〕・乙丑〔科の〕進士なり。崇禎十七年に任ぜられて總督漕運都御史に至る。正氣長才（公明正大な気概と特に優れた才能）ありて風采（人品）岳立（際立つ）す。初め涇陽知縣に任ぜられるに，正に兵荒（戦禍）<sup>こも</sup>交ごも至るに値

る。公（路振飛）多方（様々な方法）もて賑饑（饑民を救済する）・固守（堅守）を規畫（取り決める）す。民 頼り以て安んず。卓異もて御史を授けらる。[そして]、閩に按たり、吳に按たり。貪吏を捉拿して解綬（免職）して去さす者有り。疏もて權輔を參し、直聲（正直の名聲）一時を震わす。甲申（崇禎十七年）、總漕淮陽たり。逆闖の亂の在る所風靡（降伏）す。公（路振飛）と巡按の王燮 血酒（盟誓する時に飲む血を滴らせた酒）を飲み、泣きて衆に「勤王忠義」を諭す。激する所の人皆な 矜奮（奮起）す。大盜の徐繼孔等を撫し、偽官の呂弼周・王富等を擒え、力めて江淮を保つ。國運を四海君無きの日に扶ち、手づから東南半壁の天下を挈（ひっさ）げて以て朝廷に還す。[そうしたことは] 宋の張魏公（張浚<sup>①</sup>）も及ばざるなり。既にして萬里を間關し、志を九京（九泉）に賁（たま）う。氣 河岳（黃河と五岳の並稱）より壯なり、光 日月と争う。「南朝（南宋）の李侍郎（李若水<sup>②</sup>）一人」は、邑中 今に至るまで以て美談と爲し、公（路振飛）を並べて之を二とす。其の他の學宮を修む・義塾を建つ・郡邑の利害を争うは、未だ殫述（述べつくす）す可からず。國史の出づるを俟ちて續辭を傳うるを爲さん（順治『曲周縣誌』卷之二・選舉志・科第・明・「路振飛」条・五十葉～五十一葉）。

①張浚（1096年～1164年。字は德遠，諡は忠獻）は，南宋初期の政治体制の整備に努力するが，最終的には失脚する。唐の宰相張九齡の九世の孫。

②李若水（1092年～1126年。字は清卿，諡は忠愍。初名は，若氷）は，路振飛と同郷の曲水の人。北宋に忠節を尽くし，義に就く。『宋史』（卷四百四十六・列傳第二百五・忠義一・「李若水」）に「金人相與言，『遼國之亡，死義者十數，南朝惟李侍郎一人（〔北宋が滅ぼされた時に〕金人 相與に言う，『遼國の亡ぶに，義に死する者は十數なり。南朝（北宋）は惟だ李侍郎（李若水）一人なり』〕」とある。

③順治『曲周縣誌』（卷之一・建置志・學校・十八葉）によれば，曲周縣の縣學は路振飛が崇禎十三年に數千金を出して修理し，四年をかけて完成したという。

儒學は縣治の東に在り。金の大定乙巳，知縣の張□（一字空格）建つ・・・崇禎十三年，鄉官的路振飛 復た數千金を出し修理す。木植（木柱；木材）稍や其の舊に仍り，隻碑・片瓦 俱に易世（改朝换代）にして輝煌を獲。工は四年を閲て始めて畢る（順治『曲周縣誌』卷之一・建置志・學校・十八葉）。

④路振飛が建てたのは「公善書院」と推測される。順治『曲周縣誌』によれば，つぎのようにいう。

公善書院 東關道の南に在り。邑人の路振飛 建つ。地は五十畝，城東の十方院に在り。辛全（汾州の人）の〔撰した〕碑記は「藝文志」（卷之四・藝文志・記・「公善書院記」条・二十五葉）に見ゆ（順治『曲周縣誌』卷之一・建置志・學校・「公善書院」条・十九葉）。

路振飛，号は皓月で，天啓四年甲子科（一六二四）の舉人で天啓四年乙丑科（一六二五）の進士である。崇禎十七年に總督漕運都御史に任ぜられる。公明正大な氣概と特に優れた才能があり，人品が際立っていた。はじめて陝西涇陽縣の知縣に任命されるが，ちょうど戦禍が盛んになった時期であった。路振飛は，さまざまな方法を用いて飢えに苦しんでいる人たちを救済し，縣城を固く守るなどの計画を立てた。人々は，それを頼りにして安心した。卓異（勤務評定で

最高の評価)とされ御史に抜擢される。そして福建道監察御史、続いて巡按蘇松等處監察御史となった。貪官を摘発して、辞職させた者もいた。上疏して権力のある大臣を弾劾し、正しいことを行っているという名声は、当時鳴り響いた。甲申(崇禎十七年)、總漕總督となる。闖賊の叛乱が起こった所は、闖賊に降伏していった。ところが、路振飛と巡按御史の王燮とは、血を滴らせた酒を飲んで誓い合い、泣きながら人々に「勤王忠義」を述べた。感激した人たちは、皆奮起した。大盜賊の徐繼孔などを手なずけ、闖賊に任命された呂弼周・王富などを捕らえ、江淮地域を保った。明朝の国運を君主不在の時期に保持し、手ずから東南一帯を南明政權に伝えた。そうした行為は、南宋の張浚も及ばなかったことである。そうこうして、間道伝いに万里を移動して[殘明政權に仕えに行き]、志を九泉に伝えた。気は黄河や五岳などの山川よりも壮大であり、光は日月と競い合っている。「南朝(南宋)の李侍郎一人」と言われた李若水のことは、今に至るまで美談とされているが、路振飛もそれに並べることができる。曲周縣の縣學を修復したこと、公善書院を設立したこと、地域の利益のために争ったことなど、まだ述べつくすことはできない。「國史」が編纂されるのを待って、この続きを伝えたいと思う、という。また、路振飛の子供たちが歸莊(一名は祚明、字は玄恭。江蘇崑山の人。明の諸生。歸有光の曾孫。明・萬曆四十一年[一六一三]～清・康熙十二年[一六七三])に資料を渡して書いてもらった「左柱國光祿大夫太子太師吏部尚書兼兵部尚書武英殿大學士路文貞公行狀」<sup>1)</sup>は、最初に路振飛の職歴をつぎのようにいう。

謹しみて按ずるに、公 諱は振飛、字は見白、號は皓月、廣平曲周の人なり。天啓五年(一六二五年)の進士に<sup>こうかく</sup>申し、涇陽知縣に授けらる。崇禎四年(一六三一年)、考績(勤務評価)最たりて、四川道監察御史に擢せられ、<sup>しばしば</sup>歴差(派遣)され太倉銀庫(京師の米倉の銀の収納庫)を巡視す。[そして]巡按福建(福建道監察御史)、巡按蘇松等處(巡按蘇松等處監察御史)たり。言事(意見を言上する)を以て旨に忤い、河南按察司簡較に降る。稍(しばらく)して上林苑良牧署丞・太僕寺寺丞に遷る。奉差(勅命を奉じて出張する)して慶成王を冊封す。光祿寺少卿に陞る。十六年、都察院右僉都御史に擢せられ、漕運を總督す。十七年、解任さる。尋いで内艱(母喪)に<sup>あた</sup>り、家に即き、右副都御史を加えら

1) 歸莊は、「左柱國光祿大夫太子太師吏部尚書兼兵部尚書武英殿大學士路文貞公行狀」に、この「行狀」が書かれた事情を、つぎのように説明する。

左柱國光祿大夫太子太師吏部尚書兼兵部尚書武英殿大學士路公、己丑(順治六年)四月二十二日(西暦：一六四九年六月一日)を以て廣州の順德に卒す。後十年己亥(一六五九年)十月、公(路振飛)の子の中書舍人の[路]澤溥 公(路振飛)の柩を扶(護持)して蘇州に至り、公(路振飛)の少子の光祿寺少卿の[路]太平と將に公(路振飛)の行いを狀せんとす。會たま公(路振飛)の元配一品夫人の王氏[順治十六年]十一月十二日(西暦：一六五九年十二月二十五日)を以て山中に卒す。[路]澤溥等 苦次(服喪の場所)に哀荒(悲しむ)たりて、文を成す能わず。略(簡略)に公(路振飛)の世族(家系)・歴官・行事を序し、其の友歸莊に屬し之が狀を爲さしむ(上海古籍出版社『歸莊集』卷八・「左柱國光祿大夫太子太師吏部尚書兼兵部尚書武英殿大學士路文貞公行狀」)。

る。明年、唐王 召して都察院右左都御史と爲す。尋いで弁太子太保吏部尚書を拜し、兵部尚書文淵閣大學士を兼ね、玉督師を賜う。明年、太子太師武英殿大學士に進み、勳柱國、階は光祿大夫。後二年、粵中に卒す。左柱國特進光祿大夫太傅を贈られ、文貞<sup>2)</sup>と諡さる(上海古籍出版社『歸莊集』卷八・「左柱國光祿大夫太子太師吏部尚書兼兵部尚書武英殿大學士路文貞公行狀」)。

路振飛、字は見白、号は皓月、廣平曲周の人である。天啓五年(一六二五)に進士となり、陝西涇陽縣の知縣となる。崇禎四年(一六三一)に、考績(勤務評価)が特にすぐれているとして、四川道監察御史に拔擢され、しばしば派遣されて太倉銀庫(京師の米倉の銀の収納庫)を視察した。そして、巡按福建(福建道監察御史:『明史』職官志によると在外巡按は一名)・巡按蘇松等處監察御史(『明史』職官志によると在外巡按御史は三名任命された)などを歴任する。意見を言上して皇帝の考えに逆らい、河南按察司簡較に降格される。しばらくして上林苑良牧署丞、そして太僕寺寺丞に異動になる。派遣されて慶成王を冊封する。そして、光祿寺少卿に陞る。崇禎十六年に都察院右僉都御史に拔擢され漕運總督となる。崇禎十七年に南明政權下で解任される。続いて母の服喪のため、ひきこもる。右副都御史の官位を加えられる。明年、殘明政權の唐王に招かれて都察院右左都御史となる。続いて弁太子太保吏部尚書を拜命し、兵部尚書文淵閣大學士を兼ねて、玉督師を賜った。翌年、太子太師武英殿大學士に進められ、勳柱國で官位は光祿大夫となった。二年後に廣東で亡くなる。左柱國特進光祿大夫太傅を贈られ、文貞と諡される。

以下で、まず基本的な伝記資料と考えられる歸莊の「左柱國光祿大夫太子太師吏部尚書兼兵部尚書武英殿大學士路文貞公行狀」を中心として、(1)で涇陽縣知縣時代を、(2)で御史臺の時を、(3)で福建道監察御史在任時代を(4)で巡按蘇松等處監察御史在任時代を、それぞれ検討してみたい。

2) 南明殘存の唐王政權から贈られた「文貞」の諡号は、明王朝では、楊士奇と徐階に贈られている。明の王世貞(字は元美、号は鳳洲、又の号は弇州山人。江蘇太倉の人。明・嘉靖五年〔一五二六〕～萬曆十八年〔一五九〇〕。嘉靖二十六年丁未科(一五四七)二甲八十名の進士)の『弇山堂別集』によると、楊士奇については、  
文臣少師・兵部尚書・華蓋殿大學士・贈太師の楊士奇  
學に勤めて問うを好み、清白にして節を守る(『弇山堂別集』卷七十一・諡法二・二字諡・「文貞」条)。  
とあり、徐階については、  
文臣少師・太子太師・吏部尚書・建極殿大學士・贈太師の徐階  
道德博聞にして、大慮(深思遠慮)克く就くなり(『弇山堂別集』卷七十一・諡法二・二字諡・「文貞」条)。  
という。

## (1) 涇陽縣知縣

歸莊の「左柱國光祿大夫太子太師吏部尙書兼兵部尙書武英殿大學士路文貞公行狀」は、陝西涇陽縣の知縣であった時の路振飛をつぎのように伝える。

其の涇陽〔知縣〕爲りし時、省直競いて逆閹に爲<sup>ため</sup>に祠を建つ<sup>①</sup>。陝西の撫按（巡撫と按撫）屬官を召して卜地（祠を建設する場所を選定する）を議し、惟れ涇陽が宜しと。公（路振飛）力めて持して不可とし、且つ衆に揚言して曰く、「即ち事成れば、物議（人々の非難）を如何せん。寧<sup>すなわ</sup>ち此の事を以て罪を獲るも、祠は建つ可からず」と。亡何（しばらくして）閹敗れ、事遂に已む。瑞王府は漢中に在り、贍田（家口を養う田地）西安に派して及ぶ。屬邑王莊（藩王が与えられた田地）を設くることを議す。公（路振飛）將に貂使（側付きの官員）の勾管（勝手に徴収する）有らんとすれば、地方且に多事あらんとするを慮り、乃ち大吏と謀り、糧を布政司に納め、轉じて藩府に詳（下級官員から上級官員に報告する）するを准<sup>ゆる</sup>し、輒ち自から徴収するを得ざらしむ。郡邑之を頼む。流寇縣界に入る。公（路振飛）故より騎射を善くす。親から義勇を率い、矢石を冒し之を撃走さす。又た「散夥（解散）歌」を作り賊中に傳え、以て其の黨を離散（分離）せしむ。客兵至るに、預め芻糧（軍用の糧秣）を設け、境上に待つ。〔おかげで〕縣擾<sup>みだ</sup>さるる無きを得。征輸（賦税の徴収）方有り、羨餘（正賦外の付加税）を取らず。饑民に賑し、獄囚を恤<sup>あわれ</sup>み、胥徒（官府衙役）に禁じて下郷するを得ざらしむ。吏と爲りて六年、民咸な歌（贊美）して其の澤を樂思す（上海古籍出版社『歸莊集』卷八・「左柱國光祿大夫太子太師吏部尙書兼兵部尙書武英殿大學士路文貞公行狀」）。

①徐肇台の崇禎刻本『續丙丁記政錄』（全一卷・「天啓六年」閏六月初二日）条・五十五葉）によると、浙江巡撫の潘汝楨（安徽桐城の人。萬曆二十九年辛丑科（一六〇一）三甲一百十九名の進士。天啓六年三月六日～天啓七年三月二十日在任：『續丙丁記政錄』・『先撥志始』ともに「禎」に作る）が魏忠賢の生祠の建設を願い出たのが最初とされる。なお、文秉（字は蓀符、号は竺陽山人。江蘇長洲の人。萬曆三十七年（一六〇九）～康熙八年（一六六九）二月。六十一歳で卒す。國子監生）の『先撥志始』卷下によれば「天啓六年六月」のこととする。

②瑞王常浩は、神宗萬曆帝の第五子。天啓七年に漢中にお国入りする。

③『書經』呂刑に「一人有慶，兆民頼之（一人 慶有れば，兆民 之を頼む：天子に善があれば，億兆の民はそれを頼りにする）」。

④道光辛丑春鐫『路文貞公集』全一卷所収（一葉～二葉）の「正命歌四章」がこの「散夥歌」に相当するのかもしれない。

路振飛が涇陽知縣であった天啓六年、各省や南北直隸では、競って逆閹の魏忠賢のためにその生祠を建てた。陝西の巡撫と巡按は屬官を召し出して、祠を建設する場所を選定することを議論させたところ、涇陽に建てるのがよいとされた。公（路振飛）は懸命に主張して不可とした。

さらに官員たちに、「この生祠を建ててしまえば、人々の非難をどうするのか。このことで罪を得ようが、生祠は建てるべきではない」と言い放った。しばらくして、逆閹の魏忠賢は敗れ去り、生祠のことは、取りやめになった。瑞王府は、漢中に領国があった。贍田（王府を維持するための田地）は西安にまで及んだ。付近の諸縣は、王莊の設置を提案した。公（路振飛）は、王府付きの役人が勝手に徴収するようなことになれば、地域で問題が多発することを心配し、上役と相談して租税を布政司に納めさせ、それを王府に報告して改めて納めることを認めてもらい、王府みずから徴収しないようにさせた。郡県は、それを頼りにした。流寇が県境に入り込んできた。公（路振飛）は、もともと騎射に優れていた。みずから義勇兵を率いて、矢石を冒して打ち払った。さらに「散夥（解散）歌」を作って賊中に広めて、賊を分断させた。外地からの軍隊がやってくれば、事前に軍隊向けの糧秣を用意し、県境に置いた。おかげで、涇陽縣は乱されることはなかった。徴税は公正であり、定まった額以上は徴収しなかった。飢えた人たちに施し、囚人を気遣い、胥吏に外出して悪事をすることを禁じた。路振飛が涇陽知縣となって六年、人々はみな路振飛を賛美して、その恩沢を享受できることを楽しく思った、という。

#### ①涇陽縣での事績

路振飛が涇陽知縣あった時のこととして、清・康熙六年に陝西巡撫（康熙元年～康熙七年在任）の賈漢復（膠侯・静庵。山西曲沃の人。明の副將から清政權に投降して、正藍旗漢軍に属す。？～康熙二十六年）によって編纂された『陝西通志』は、つぎのようなことを記している。

路振飛，〔河北〕曲州の人。天啓の進士。涇陽知縣たりて，甫めて下車（到任）するに，郷紳の奴の誣讐（誣告）を被るあり。奉けたる旨もて訊（審問）擬す。時に，争いて逆璫の意を承けて已に文（判決）ありて大獄を成し致す。〔そのため〕屬する四邑<sup>①</sup>の令 會訊するに，敢えて平反する莫し。〔路振飛は〕獨り毅然（きっぱり）として判じて曰く，「某は必ず死する法無し」。事に當りて，咸な之を難しとす。〔路〕振飛 曰く，「即ち譴責（叱責）有れば，某（路振飛）力めて之を任ず。法を曲げて紳を讎<sup>けが</sup>し，以て罔上（君主をあざむく）するが若きは，〔會訊する諸々知縣たちと〕盟する所に非ざるなり」と。既にして覆奏し，可（裁可）を得。戊（崇禎元年：戊辰）・己（崇禎二年：己巳）の間歲（隔一年）大祲（大飢饉）あり。法を設けて蠲賑（租税を免除して飢饉を救済する）し，流移（行き場のなくなった人たち）を撫集（慰撫して集める）し，凡そ數萬人を活（救済）す。未だ幾ばくならずして，旁縣の盜 起きて雲陽に延及す。〔路〕振飛 郷勇（郷兵）の人を團練（組織，訓練）し，自ら戦を爲し，身ずから士卒に先んず。其の渠魁數十人を殲す。遂に〔寇は〕相戒めて，敢えて境に入ること母れとす。又た渭水の通商の舳艫<sup>じくろ</sup>の滿望（通商する商船が前後相接する）あり，涇に至れば舟楫（船夫）に任さず。〔路振飛は〕親<sup>みづ</sup>から河澍（河邊）を歴て深淺を量度（測量）し，泥石を疏蕩すれば，舟す可きを度り，而して後止む。乃ち先ず小船を爲して試みに之を運び，漸く之に恢（ひろげる）するに巨艦を以てす。渭

川の百貨 咸な涇に集まり、省く所の輦負の費は以て什之八なり。復た民の自から船を造りて通貨（交易）するを聽<sup>ゆる</sup>すを計り、税を以て擾民（人々を苦しめる）するを得ず。咸な之を便とす<sup>3)</sup>。尋いで〔四川道監察〕御史に擢せらる（康熙『陝西通志』卷十八中・名宦・「路振飛」条・八十五葉～八十六葉）。

①周りの四縣は、地図で見える限りでは、三原縣・高陵縣・醴泉縣・咸陽縣である。なお、西安府には、長安縣（西安府附郭）・咸寧縣（西安府附郭）・咸陽縣・興平縣・臨潼縣・藍田縣・涇陽縣・三原縣・高陵縣・鄠縣・盩厔縣・渭南縣・富平縣・醴泉縣の十四縣が属している。

②延及：『書經』呂刑に「蚩尤惟始作亂，延及於平民，罔不寇賊（蚩尤 惟れ始めて亂を作し，平民に延及し，寇賊（奪ったり殺傷する）せざるなし）」。

路振飛は、河北曲州の人で、天啓の進士である。涇陽知縣となって、着任すると、その地の郷紳が奴僕によってでっち上げの罪状で責められていた。路振飛は、命ぜられてそれを審議した。この案件は、宦官派の意向を受けて、すでに判決が出され大獄となっていた。そのため、まわりの四縣の知縣、集まっても、あえてそれが無実の罪であると言い立てなかった。ところが路振飛はきっぱりと判決して「郷紳の某は処罰を受けるものではない」とした。判決を出すにあたって、皆はそれを難しいことだとした。ところが路振飛は「叱責されることがあれば、私（路

### 3) 『天下郡國利病書』には、路振飛の申文がつぎのように引用されている。

崇禎二年（一六二九）、〔涇陽縣〕知縣の路振飛の申文（上行文書）〔ありて、以下のように言う〕。竊かに炤（照：調べ考える）するに、涇陽の迤（以）南に涇河一帯（延びている）有りて、直ちに渭水に通ず。渭水は商賣の舳艫 相い望む。而れども涇〔河〕は則ち其の安瀾（水波がおだやか）に任ずるも、舟楫を載せず。是れ天地の自然の利を以て涇人に予うるに知らざるなり。其れ以て運糧・筏木す可くは姑く論ずる勿し。即ち石炭の一節の如きは、涇邑は人稠地狹し、樵薪（薪を採る）す可くも莫し。而して止だ任輦（荷物担ぎ）の些須（わずかな）炊爨（炊飯）に供するに藉るのみ。往來の刀（力）甚だ艱し、故に毎炭一石、賤なるも四錢を下らず、貴ければ則ち五六錢なるも止まらず。民間 淫雨（久雨）冰雪にして火を舉ぐる能わざる者有り。米無きの苦しみに盡きるに非ざるなり。本縣（路振飛）此れを見る有りて、涇河の岸に至る毎に、則ち流れに臨みて相度（觀察して考える）し、之を舟子（船頭）に問う。舟子 曰く、「涇河 水急にして石多く、淺深一ならず。〔そのため〕、商船 敢て往來せず」と。本縣（路振飛）便ち吏と水夫と河に沿いて踏驗（実地調査）す。甚だ淺き處と雖も、水は亦た尺許、深き者は竟に「蒙衝の巨艦（外が狭くて長い巨船）の一毛」（朱熹の「觀書有感」詩之二に「蒙衝巨艦一毛輕」）〔通れるくらいに〕なり。職（路振飛）欣然（喜んで）として謂う是れ舟す可きなり、と。然れども又た偶爾（時には）行ない難きを恐る。〔というのも〕、民間 此の小費を惜しみ、反って後來の興利の端を阻めばなり。乃ち先ず自から刀船（大船）を爲し、便ち水夫をして之を臨潼縣地名交口に駕（運航）させ、炭を運ぶこと一次（一度）ならしむ。往來は止だ三日にして炭已に卸装（荷下ろしする）す。任輦する者に視れば盤費は什の七を省く。又た水夫馬守倉等の各渡の餘船併せて前船に預め支するに工食を以てし、連運すること數次ならしむ。前に在りては毎斗炭四分、今は止だ二分五釐なり。雨雪の載塗・輪蹄の阻礙するに至れば、其の利益を爲すこと尤に平日に倍す。況んや河道 疏通し、渭川の粟之木之雜貨、亦た安くに往きて涇民の用に供せされざるをや。伏して批示を乞うに、今後の造船して往來するは、民の自便に任せ、商賈 税無し、私船 擾わさず。河中に偶たま砂石の處有れば、官 爲めに法を設け疏濬す。今、民情欣然として樂就し、庶うに利益弘きことを、と（『天下郡國利病書』原編第十八冊・陝西上・三十六葉～三十七葉）。

振飛)が責任を取ります。法律をまげて郷紳を罪に落とし、主君を欺くようなことは、一緒に審議する知縣の皆さんと誓うことはできません」と言った。そうこうして再度上奏して、裁可された。崇禎元年から崇禎二年の間にわたって、大飢饉があった。路振飛は法を設け、租税を免除して飢饉を救済し、行き場のなくなった人たちを慰撫して集めて、数万人を救済した。まもなく、近傍の縣の盜賊が沸き起こり、雲陽に波及した。路振飛は、郷兵を組織し、戦い、士卒の先頭に立った。そして、盜賊の頭目数十人をたおした。とうとう、盜賊たちは、無理をして路振飛の治める涇陽縣の県境には入らないようにと戒めあったという。また、渭水の貨物を乗せた船が前後相接する姿が多くあったが、涇水を通過する際には、船舶を利用せず[陸路を使った]。路振飛は、みずから川辺に行き涇水の深さを測量し、泥石を浚渫すれば、船が通れるようになることを理解して、調査を取りやめた。そして、まず小さな船で貨物を運び、それを押し広げて、大きな船にまで試した。[そのおかげで]、渭川の貨物はすべて涇水に集まるようになり、それまで陸路を利用していた費用の八割を省くことができるようになった。さらに、人々が自分で船を建造して商売するのを認めるように図り、税金を徴収して人々を苦しめることをしなかった。人々は、それを歓迎した。そして、路振飛は四川道監察御史に抜擢された、という。

✓ 崇禎二年(一六二九)、涇陽縣知縣の路振飛が以下のような意見書を提出した。それには、つぎのようにあった。私(路振飛)がひそかにつぎのように調べ考えます。涇陽県以南には、涇河が延びて、直接渭水に通じています。渭水は、商船がひしめき合うような状態です。しかし涇河は穏やかであるにもかかわらず、船が行き来していません。これは、天地自然が涇県人たちに利益をもたらしているのに、それが分かっているのです。田賦の運搬や筏を組んでの材木の運搬などは、しばらく置いておくとして、石炭の事項については、涇県は人口が多いものの土地が狭く、薪を採りそろえることができません。そこで、ただ荷物担ぎによってもたらされるわずかなものを炊飯に用いるだけです。運搬できる力は、きわめて限られます。そのため、炭一石が四錢を下回ることがなく、高くなれば五六錢を超えてしまいます。人々の間では、長雨や氷雪の時でも、火をおこすことができない者がいます。米がないという苦しみにとどまらないのです。私(路振飛)は、こうしたことを見て、涇河の岸に至るたびに、その流れを見て、観察して考え、船頭に質問しました。船頭は、「涇河は水流が急で、砂礫が多く、深さも一定していません。そのため、商船は往来しようとしていないのです」と答えます。私(路振飛)は、胥吏・船頭とともに涇河に沿って実地調査しました。そして、最も浅いところであっても水位は尺(約30cm)あまりで、深いところは「蒙衝の巨艦一毛(外が狭くて長い巨船の一部分)」が通れるくらいでした。卑職(路振飛)は、喜んでこれは船を運行できると言いました。しかし時には「船の運航が」行ない難いことを恐れます。というのも、民間はわずかな涇河の整備費用を惜しみ、かえって後々の利益を得ることになる機会を阻むからです。そこで、まず大船を用意し、臨潼縣の交口に運航させ、一度炭を運搬させました。往来はたった三日で炭の荷下ろしを致しました。持ち運ぶことにくれば、費用は七割も節約できたのです。また、馬守倉などの渡し船の余りや最初に運航させた船に事前に工賃を支給し、続けて何度か運送させたところ、以前は一斗の炭が四分だったのが、いまでは二分五釐となりました。雨や雪の中を道で荷ったり、荷車に邪魔されたりする時の炭の費用にくれば、その利益は平日の倍になります。ましてや涇河が運航できるようになり、渭川で運ばれる食糧や材木や雑貨などがどこかに行き涇県の人たちに供給されないことはなくなります。そこで、ここに伏して今後は造船して涇河を運行することは人々の自由に任せ、商船からは税金を取らず、個人の船舶には無理なことを命じないようにし、河川に砂石があれば、官で法を設けて疎通させることを、お認めいただけるよう願います。そうすれば、人々は喜んで楽に生活し、利益がおおきくなります、という。



## ②流寇

「流寇 縣界に入る（流寇が県境に入る）」は、崇禎二年のことだと考えられる。『流寇長編』によると、

〔崇禎二年〕四月甲午初九〔日〕、固原の賊 耀州を犯（侵犯）す。督糧參政の洪承疇<sup>①</sup> 官民郷勇萬餘を合わせ、賊の王左掛（原名は王之爵）を雲陽に圍む。賊 窮蹙し、夜に雷雨に乗じて圍みを潰して淳化に走げ（逃げ出す）、神道嶺に入る。追いて二百餘級を斬る（『流寇長編』卷二・「崇禎二年四月九日」条）。

①洪承疇：字は彦演，号は亨九，諡は文襄。福建南安の人。萬曆四十四年丙辰科（一六一六）二甲十七名の進士。明・萬曆二十一年（一五九三）～清・康熙四年（一六六五）。李自成などの流寇の討伐に活躍する。後に清政權に降伏し、清初期の江南經營に尽力する。

崇禎二年四月九日に固原（直線距離で涇陽からほぼ北西へ約 280 キロ）で起こった流賊が、耀州（直線距離で涇陽からほぼ北西へ約 45 キロ）を侵犯した。督糧參政の洪承疇が官民の軍勢を集めて、流賊の王左掛（原名は王之爵）を雲陽（直線距離で涇陽からほぼ北へ約 15 キロ）で取り囲んだ。流賊は、追い詰められ、夜の雷雨に乗じて囲みを破って淳化（直線距離で涇陽からほぼ北へ約 50 キロ）へ逃げ、神道嶺に入った。洪承疇は追撃して二百人あまりを斬った、という。

文秉の『烈皇小識』によると、八月のこととする。また、文秉はこの流賊のことを「此れ流賊の始まりなり」とコメントしている。

〔崇禎二年〕八月、賊 復た耀州を犯す。參政の洪承疇 官兵・郷勇共に萬餘人を合わせ、賊を雲陽に撃ち之を敗る。夜 來りて、賊 雷雨に乗じて、淳化を掠（略奪）し神道嶺に入る。此れ流賊の始まりなり（『烈皇小識』卷二）。

## (2) 御史臺

歸莊の「左柱國光祿大夫太子太師吏部尚書兼兵部尚書武英殿大學士路文貞公行狀」は、御史臺の時の路振飛をつぎのように伝える。

御史臺に在りて、疏もて時事十大弊を言う<sup>①</sup>。一に曰く、「務苛細而忘政體（苛細に務めて政體を忘る）」、二に曰く「民愈窮而賦愈急（民 愈々窮まりて賦 愈々急なり）」、三に曰く「廉恥喪而官方壞（廉恥 喪われて官方（官員の規律）壞る）」、四に曰く「有事急而無事緩（有事 急にして無事 緩なり）」、五に曰く「知顯患而忘隱憂（顯かなる患を知りて忘隱れたる憂を忘る）」、六に曰く「求治事而不治人（事を治むることを求めて人を治めず）」、七に曰く「貴外重而責內輕（外を貴とぶこと重く内を責めること輕し）」、八に曰く「嚴於小而寬於大（小に嚴にして大に寬なり）」、九に曰く「臣日儉而主日疑（臣 日々儉み主 日々疑う）」、十に曰く「有明旨而無奉行（明旨有りて奉行する無し）」。草場 火あり、監督官の高倬・馬思理等 皆な下獄す。公（路振飛）と祁彪佳と合疏して申救（無実の罪だと訴

えて救い出す)し、釋さるるを得。又た疏もて首輔の周延儒(江蘇宜興の人。萬曆四十一年癸丑科(一六一三)一甲一名の進士〔狀元〕)を姦邪(邪惡)にして誤國(国家に損害をもたらす)なりと劾す。又た疏もて閣臣の宜しく預め試みるべしと言ひ、并せて次輔の王應熊(四川巴縣の人。萬曆四十一年癸丑科(一六一三)三甲十八名の進士)・溫體仁(字は長卿, 号は圓嶠, 諡は文忠(福王政權の時に諡は取り消される)。浙江烏程の人。萬曆二十六年戊戌科(一五九八)二甲四十三名の進士)の公論の與からざるを指摘す。又た再び疏もて冢宰(吏部尚書)の閔洪學(浙江烏程の人。萬曆二十六年戊戌科(一五九八)二甲二十六名の進士)を徇私(私利のため不正を働く)にして溺職(職務を怠る)なりと劾し、并せて山東督撫の劉宇烈(四川綿竹の人。萬曆三十五年丁未科(一六〇七)三甲一百八十八名の進士)・余大成(應天府江寧の人。萬曆三十五年丁未科(一六〇七)二甲五十二名の進士:崇禎四年正月二十五日~崇禎五年 山東巡撫)等 封疆(任地)を敗壞(破壊)〔すると弾劾〕するに及ぶ。是に由りて權貴 側目(憤り恨む)す(上海古籍出版社『歸莊集』卷八・「左柱國光祿大夫太子太師吏部尚書兼兵部尚書武英殿大學士路文貞公行狀」)。

①道光辛丑春鐫『路文貞公集』全一卷にこの「時事十大弊疏」(十七葉~十九葉)が収められている。それには「崇禎二年四年十二月初五日」と日付が附されている。

四川道試觀察御史<sup>4)</sup>となると、崇禎四年十二月五日に「時事十大弊」を奏上した。その十弊の内容は、「務苛細而忘政體(苛細に務めて政體を忘る)」「民愈窮而賦愈急(民 愈々窮まりて賦 愈々急なり)」「廉恥喪而官方壞(廉恥 喪われて官方(官員の規律)壞る)」「有事急而無事緩(有事 急にして無事 緩なり)」「知顯患而忘隱憂(顯かなる患を知りて隠れたる憂を忘る)」「求治事而不治人(事を治むることを求めて人を治めず)」「貴外重而責內輕(外を貴とぶこと重く内を責めること輕し)」「嚴於小而寬於大(小に嚴にして大に寬なり)」「臣日儉而主日疑(臣 日々儉み主 日々疑う)」「有明旨而無奉行(明旨有りて奉行する無し)」である。また、草場で火災があり、その責任を取らされて監督官の高倬・馬思理などが獄につながれた。公(路振飛)と祁彪佳とが冤罪だと申し立てて、釈放された。さらに、周延儒が邪惡で国家に損害をもたらしていると弾劾した。そして、大學士を任用するにあたっては試用すべきであると言ひ。次席大學士の王應熊・溫體仁は世論の支持がないと指摘した。また、上疏して、吏部尚書の閔洪學が私利のため不正を働き職務を怠っていると弾劾した。それにあわせて、山東督撫の劉宇烈(四川綿竹の人。萬曆三十五年丁未科(一六〇七)三甲一百八十八名の進士)・

4) 試觀察御史は、一年の試用期間中の御史である。都觀察院に入り觀察御史となった官員は、まず試職の身分でもって觀察院で仕事を一年間行なう。政務に習熟し觀察院がその人品才能を考察し、職務に堪えるものに実職をあたえる。『崇禎長編』(卷之五十四・「崇禎四年辛未十二月甲戌(六日)」条)に、「四川道試御史路振飛上言時事十大弊」とあるので、路振飛は御史に任命された試用期間中にこの提案を行なっている。また、『崇禎長編』では、提案の日付が十二月甲戌(六日)になっていて、『路文貞公集』で、「崇禎二年四年十二月初五日」とする日付と異なっている。

余大成（應天府江寧の人。萬曆三十五年丁未科（一六〇七）二甲五十二名の進士：崇禎四年正月二十五日～崇禎五年 山東巡撫）などが治めている地域をむちゃくちゃにしていると述べた。こうしたことによって、実権を持った者たちは、憤慨し恨んだという。

### ①時事十大弊

道光辛丑春鐫『路文貞公集』には、この「時事十大弊疏」が収められている。それによると、この上奏文は、崇禎四年十二月五日に提出されている（『崇禎長編』では「六日」とする）。路振飛は、その冒頭でつぎのようにいう。

「時事に十大弊有り。敬しみて愚衷を竭くし、仰ぎて聖斷を祈る」事のためにす。時事（時局）今日に至り、弊端（弊害）叢集す。焦唇（カラカラになった唇）禿穎（穂先のなくなった毛筆）もて殫述する能わず。頃ごろ科臣の顔繼祖の條陳する十大弊の嘉納（ほめたたえて受け入れる）を荷蒙（こうむる）するを見る。此れ従りするに一弊を釐（おさ）めれば則ち一治有り。太平 指日（日ならず）の間に在り。臣（路振飛）愚昧にして、<sup>かたじけな</sup> 叨くも言班に列し、敢えて芻蕘（淺陋な見解）を秘して、以て上聞せずと雖も、竊かに謂う時事 尙お十大弊有りて、變通（情勢に応じて適切に処理する）す可きなり・・・（道光辛丑春鐫『路文貞公集』全一卷・「時事十大弊疏」・十七葉）。

①『崇禎長編』卷之五十三・「崇禎四年辛未閏十一月癸亥（二十四日）」条によれば、この顔繼祖の提案は、崇禎四年閏十一月二十四日に行われている。顔繼祖は、福建龍溪の人（『明史』には漳州の人とする）。萬曆四十七年己未科（一六一九）三甲八十四名の進士で、この時は吏科都給事中であった。

時局は、今になり弊害が群がり集まってきております。カラカラになった唇や筆先の毛のなくなった筆では詳しく述べつくすことはできません。この頃、吏科都給事中の顔繼祖の箇条書きにして提出した十大弊の上奏文が皇帝陛下に嘉納されたことを拝見いたしました。ここからすると、一つの弊害を正せば一つの安定が得られます。世の中の太平は、日ならずしてやってまいります。臣（路振飛）は、能力がないにもかかわらず、かたじけなくも科道官の職にあり、あえて薄っぺらな見解を秘めたままにして、奏上いたしておりませんが、時局には、まだ十の大きな弊害があり、情勢に応じて適切に処理すべきと考えております、

といって、「十大弊」について説明する。

『崇禎長編』卷之五十四・「崇禎四年十二月甲戌（六日）」条には、この「時事十大弊疏」が節略されて記録されているが、崇禎帝が、どのように処理したかの記載は見当たらない。

### ②草場の火災

草場の火災については、『崇禎長編』卷之六十・「崇禎五年六月壬午（十六日）」条に、

西城〔坊草場〕・北新草場<sup>①</sup>と朝天〔宮〕の日中坊の草場 俱に火あり（『崇禎長編』卷之六十・「崇禎五年六月壬午（十六日）」条）。

①『大明會典』（卷之二十三・戸部十・倉庾三・馬房等倉 草場附）によれば、京草場五處として「明智坊草場」・「安仁坊草場」・「北新草場」・「西城坊草場」・「臺基廠草場」があった。

とある。崇禎五年六月十六日に、京草場五處の西城〔坊草場〕・北新草場と朝天宮の日中坊の草場に火災があったというのである。

そして、「崇禎五年六月丙戌（二十日）」条に、つぎのようにある。

〔崇禎五年六月丙戌（二十日）〕、草場の失火を以て巡青給事中の馬思理（福建長樂の人。天啓二年壬戌科（一六二二）三甲七十二名の進士）・御史の高倬（四川忠州の人。天啓五年乙丑科（一六二五）三甲一百二十六名の進士）及び監督主事の王淪初と江之遠の四人を詔獄に下す（『崇禎長編』卷之六十・「崇禎五年六月丙戌（二十日）」条）。

崇禎五年六月二十日に、巡青給事中の馬思理と御史の高倬と監督主事の王淪初・江之遠の四人が草場の火災の責任をとらされて詔獄（天子の詔令を受けて特殊事件として裁判する）に下されたという。

祁彪佳は、自身の日記で、特疏を提出して詔獄に下された馬思理たちを救おうとしたが、姜思睿が強くとどめたと記している。

〔崇禎五年七月〕初二日・・・予（祁彪佳）之を<sup>はか</sup>商りて特疏もて馬〔思理〕・高〔倬〕を救わんと欲す。姜（姜思睿：字は顓愚<sup>せんぐ</sup>。浙江慈谿の人。天啓五年乙丑科（一六二五）三甲一百十一名の進士）力めて之を止む（『祁忠敏公日記』第三冊・棲北冗言・「崇禎五年七月初二日」条・二十五葉～二十六葉：民國二十六年（一九三七）紹興縣修志委員會校刊本による）。

そして翌日にこれは天災のためだとしようとしたものの、崇禎帝がそれを認めようとしなかったことを知ったと記している。

〔崇禎五年七月〕初三日・・・草場の失火は咎を天災に歸せんとするに、上（崇禎帝）の喜ばざる所と爲るを知る（『祁忠敏公日記』第三冊・棲北冗言・「崇禎五年七月初三日」条・二十六葉：民國二十六年（一九三七）紹興縣修志委員會校刊本による）。

『崇禎長編』によると、路振飛は、七月五日に工科都給事中の張承詔と共同で、馬思理たちを赦免してもらうように願い出るが、認められなかったと伝える。

〔崇禎五年七月辛丑（五日）〕・・・工科都給事中の張承詔<sup>①</sup>と江西道御史の路振飛 合疏して草場の失火もて逮（連座して逮捕）されし諸臣の馬思理・高倬・王淪初・江之遠等を宥（<sup>ゆる</sup>赦免）さんことを請う。允されず（『崇禎長編』卷之六十一・「崇禎五年七月辛丑（五日）」条）。

①張承詔は、江西分宜の人。萬曆四十七年己未科（一六一九）三甲一百二十四名の進士。

この事件の原因について、『南疆逸史』はつぎのようにいう。

馬思理、字は達生。閩（福建）の長樂の人なり。天啓壬戌（天啓二年壬戌科）の進士。初め烏程に令たり。治行第一とされ兵科給事中に擢せらる。〔兵科給事中として〕邊鎮（辺境

の軍事的拠点)の兵馬を査核(詳しく調査する)し、九邊(北方の九個の防衛拠点)震肅(風紀が肅然とする)たり。夙弊 盡く釐<sup>おさ</sup>まり、歳に金銀三十餘萬を省(節約して省く)く。又た太倉を巡(見回る)する時、清核(徹底的に調査する)し亦た[省(節約して省く)こと]三十萬を下らず。工科に轉じて權璫の張彝憲と抗禮(対等の礼をかわして、立場が同じであることを主張する)す。亡何(ほどなく)に、南北の草廩 同日に災あり。[張]彝憲 遂に構(誣告)して廷尉に下す。朝を舉げて力めて救い。免官されて里に歸る……(『南疆逸史』卷十七・列傳第十三・「馬思理」条)。

馬思理、字は達生。閩(福建)の長樂の人で、天啓壬戌(天啓二年壬戌科(一六二二)三甲七十二名の進士)の進士である。最初は、浙江烏程縣知縣となった。そして、実務成績優秀とされ兵科給事中に抜擢される。兵科給事中として、邊鎮(辺境の軍事的拠点)の兵馬の状況を詳しく調査したので、九邊(北方の九個の防衛拠点)では風紀が肅然となり、もともとの弊害がすべて正され、年間に三十餘萬を節約した。また太倉を見回った時、徹底的に調査してまた三十餘萬以上を節約した。工科に轉じてから、宦官の実力者の司禮監太監の張彝憲に対して対等の礼をかわして、対等であることを主張した。間もなく、南北の草廩が同時に火災にあった。張彝憲は、とうとう誣告して罪をかぶせて司法官にくださった。すると、朝廷中の官員たちが頑張って救いだした。そして免官になって故郷に帰った、という。

『南疆逸史』によれば、宦官の実力者の司禮監太監の張彝憲と問題があったために、草場の火災にかこつけて誣告されたものの、朝を挙げての援助があり、免官となり帰郷した、とするのである。

また、『崇禎長編』などには、湯開遠(舉人。湯顯祖の子)や張宸極などの多くの人たちが赦免を願い出る上奏文を提出したことが記録されている。

すると、歸莊集の「左柱國光祿大夫太子太師吏部尚書兼兵部尚書武英殿大學士路文貞公行狀」で、「公(路振飛)と祁彪佳と合疏して申救(無実の罪だと訴えて救い出す)し、釋さるを得」とするのは、すこし誇張があると考えられる。

### ③周延儒弾劾

周延儒たちを弾劾する上奏は、路振飛だけでなくかなりの御史が行なっている。その事情を、『明史稿』はつぎのように述べる。

[崇禎]五年正月、叛將の李九成等 登州<sup>せめおと</sup>を陥し、元化((孫元化:字は初陽。上海の人、籍は江蘇嘉定。萬曆四十年の學人。徐光啓に師事し西洋の火器に通じる:嘉慶『直隸太倉州志』(卷二十八・人物・列傳・嘉定縣・明・孫元化)条・三十四葉~三十五葉)による)を囚とす。侍郎の劉宇烈(四川綿竹の人。萬曆三十五年丁未科(一六〇七)三甲一百八十八名の進士)師を視(視察)するに功無し。言路は咸な[周]延儒 [劉]宇烈を庇うと指(厳しく非難する)す。是に於いて給事中の孫三傑(山東樂安の人。天啓五年乙丑科(一六

二五) 三甲一百九十七名の進士)・馮元ひょう颺(浙江慈谿の人。崇禎元年戊辰科(一六二八)二甲五十名の進士), 御史の余應桂(江西都昌の人。萬曆四十七年己未科(一六一九)三甲二百二十七名の進士)・衛景瑗(陝西韓城の人。天啓五年乙丑科(一六二五)三甲二十名の進士)・尹明翼(廣東東莞の人。天啓五年乙丑科(一六二五)三甲一百一十四名の進士)・路振飛・吳執御(浙江黃巖の人。天啓二年壬戌科(一六二二)三甲九十八名の進士)・王道純(陝西蒲城の人。天啓五年乙丑科(一六二五)三甲七十二名の進士)・王象雲(山東新城の人。天啓五年乙丑科(一六二五)三甲一百五十八名の進士)等, 屢しば[周]延儒を劾す。[余]應桂並びに「[周]延儒巨盜の神一魁の賄を納る」と謂う。而して監視中官の鄧希詔と[薊遼]總督の曹文衡(河南唐縣の人。萬曆四十四年丙辰科(一六一六)三甲一百十六名の進士。崇禎三年~崇禎五年九月戊申(十三日)在任)と相い訐奏(告発して上奏する)し, 語[周]延儒を侵す。給事中の李春旺(四川仁壽の人。天啓二年壬戌科(一六二二)三甲二百二十四名の進士)も亦た[周]延儒を論じて當に去るべしとす。[周]延儒數々上疏して辯ず。[崇禎]帝慰留すと雖も, 心動くこと無き能わず(『明史稿』列傳第一百三十二・「周延儒」条・二葉:『明史』卷三百八・列傳第一百九十六・奸臣・「周延儒」も同文)。

崇禎五年正月, 叛乱を起こした李九成などは登州せめおとを陷し, 孫元化を捕虜にした。侍郎の劉宇烈は, 督軍したのに効果がなかった。御史はみな周延儒が劉宇烈を庇っているときびしく非難した。こうして給事中の孫三傑・馮元ひょう颺, 御史の余應桂・衛景瑗・尹明翼・路振飛・吳執御・王道純・王象雲などが何度も周延儒を弾劾した。御史の余應桂はそれと同時に, 「周延儒は大盜賊の神一魁から賄賂をもらっている」といった。そして, 監視中官の鄧希詔と薊遼總督の曹文衡とがそれぞれ告発して上奏し, その告発文が周延儒のことに及んでいた。給事中の李春旺も, 周延儒は辞職すべきであると裁定した。周延儒は, 何度も上奏して弁解した。崇禎帝は, 周延儒を慰留したものの, このために周延儒を信任する気持ちが揺れた, という。

路振飛の周延儒弾劾の疏文は, 「劾首輔周延儒疏」として全文が道光辛丑春鐫『路文貞公集』に収められている。『崇禎長編』(卷之五十三・「崇禎四年閏十一月丙辰(十七日)」条)には, この「劾首輔周延儒疏」が要約されて引用される。

四川道試御史の路振飛 上言す。首輔の周延儒 賢を進めて不肖を退け, 忠心もて主に事うる能わず。徒だ營私植黨し婪賄肥家し欺君誤國のみを知る。蓋し其の行本(行動の根本)卑汚・心腹(心のうち)奸險(ずるくて陰險)なり。小忠(わずかな忠心)小信に由りて, 又た以て其の佞巧(言葉巧みに媚びへつらう)・營巧(うまく立ち回る)もて構善(善人を陥れる)を佐け, 以て其の貪を濟い, 能く人主をして信[用]させて疑わざらしむ。此れ誠に奸雄の渠魁(頭目)なり。其の罪惡・賊私(収賄する)・百般の狼籍は久しく諸臣の指す所と爲る。乃ち猶お靨顔(厚顔)にして列に就き, 引き退くを思わず。廉耻 喪盡す。祈うに皇上 立ろに斥免を賜い, 另に賢能を簡べば則ち中興の烈は猶お爲す可きなり(『崇

禎長編』卷之五十三・「崇禎四年閏十一月丙辰（十七日）」条）。

内閣首輔の周延儒は、賢者を登用し、不肖を退け、忠心から皇帝陛下にお仕えすることができておりません。ただ、私心を懷いて自分の派閥を作り、賄賂をむさぼり自分の家を肥え太らせ、皇帝陛下を欺いて国家を間違った方向に向けることを知っているばかりです。その行いは卑劣で、心根はずるくて陰險で、わずかな忠心やちっぽけな誠実さを利用し、また巧みにへつらい、うまく立ち回って、善人を陥れることを援助して、そのむさぼっていることをかくし、お上を信用させて疑いをいだかせないようにしております。これこそ本当に奸知にたけた人物の中の頭目です。その罪惡や収賄・百般の狼籍は、長らく諸臣たちの指摘するところでした。ところが厚顔で高官の地位に就き続け、引退することを思いもいたしません。廉耻すら失っております。皇帝陛下には、周延儒に免職処分をお与えになり、賢者を選抜して登用なされば、中興の勢いは起こすことができると存じます、というのである。

これに対して、崇禎帝は、

〔崇禎〕帝 以て「其の構黨（派閥を作る）挾私（私心を懷く）逞意（勝手にふるまう）にして勝ちを求む」とし、之を切責す（『崇禎長編』卷之五十三・「崇禎四年閏十一月丙辰（十七日）」条）。

と述べたという。崇禎帝は、まったく受け付けなかったのである。

『明史稿』では、多くの弾劾の文章を見ても、崇禎帝は、周延儒を信任する気持ちが「動くこと無き能わず」と記す。確かに路振飛以外の御史たちの弾劾文に対しても、崇禎帝はつぎのように批判している。

◎陝西道試御史の余應桂：〔崇禎〕帝 謂う「〔周〕延儒 清貞（清廉で節操を守る）もて任事（職務を執行する）し、私交（私的な交流）を樹てず。〔周〕應桂 何得（どのようにしてよく）誣詆せん」と。之を切責（きびしく叱責する）す（『崇禎長編』卷之五十三・「崇禎四年閏十一月己酉（十日）」条による）。

◎戸科給事中の馮元飈：〔崇禎〕帝 以て「瀆奏（むやみに奏上）し勝ちを求む」とし、之を切責す（『崇禎長編』卷之五十三・「崇禎四年閏十一月癸丑（十四日）」条による）。

◎山西道試御史の衛景瑗：〔崇禎〕帝 以て「其れ信口（でまかせに）誣巖（事を捏造して罪をなすりつける）す」とし、之を切責す（『崇禎長編』卷之五十三・「崇禎四年閏十一月丙辰（十七日）」条による）。

### （3）福建道監察御史

歸莊の「左柱國光祿大夫太子太師吏部尚書兼兵部尚書武英殿大學士路文貞公行狀」は、福建道監察御史の時の路振飛をつぎのように伝える。

其の閩を按するや、建安知縣の徐汝驛 貪殘（貪欲残忍）不法なるに、反って監司（査察

官)に賄し前院の首薦(首席の推薦)を得。始めて入謁(拝謁)するに、公庭(役所の正庁)に其の衣を褫(剥奪)し、之を獄に下す。乃ち奏聞し而して之を戍し、并せて監司を劾す。人心、大いに服し、屬吏<sup>ほしいまま</sup>の惕<sup>おそ</sup>なるは息む。海賊の劉香・紅夷(オランダ)に結びて入犯(侵犯)す。公(路振飛)と撫臣の鄒維璉<sup>5)</sup>・鄭芝龍・黃斌卿等を調度(派遣)し之を撃ち、小埕の捷・廣河の捷・料羅の捷有りて、卒に破りて之を平らぐ。銀帶を賜い、一級を加えらる(上海古籍出版社『歸莊集』卷八・「左柱國光祿大夫太子太師吏部尚書兼兵部尚書武英殿大學士路文貞公行狀」)。

福建道監察御史となり、建安縣知縣の徐汝驊が貪欲残忍で違法行為を行っているのに、かえって査察官に賄賂して前任者の首席の推薦を得ていた、はじめて徐汝驊が拝謁を申し出ると、役所の正庁でその地位を表す官衣を剥奪して、獄に下した。そして上奏して辺境警備に流した。それと同時に、監察官を弾劾した。人々はおおいに心服し、屬吏の勝手な行いは静まった。海賊の劉香が紅夷(オランダ)の援助を得て攻め込んできた。公(路振飛)と福建巡撫の鄒維璉は、鄭芝龍・黃斌卿<sup>6)</sup>などを派遣して攻撃し、小埕の勝利(『國權』は「崇禎五年十月庚辰(十六日)」に掛ける)・廣河の勝利・料羅の勝利があつて、とうとうこれを討伐した。その功績で、銀帶を賜い、一級を加えられた、という。

なお、『崇禎長編』(卷之六十三・「崇禎五年九月甲寅(十九日)」条)によれば、路振飛は、崇禎五年九月十九日に福建道監察御史に任命されている。

- 5) 『明史稿』(卷二百四十一・列傳第一百三十六・「鄒維璉」条・十三葉～十五葉)によると、鄒維璉の経歴はつぎようになる。

鄒維璉、字は德輝、江西新昌の人。萬曆三十五年丁未科(一六〇七)三甲二百二十七名の進士。福建延平府の推官を授けられる。常に固く大節を貫ぬいていた。南京兵部主事に拔擢され、員外郎に進む。服喪のため休職する。天啓三年(一六二三)、職方に復職し郎中に進み、硬骨漢ぶりを発揮する。官部尚書の趙南星に認められ、稽勳郎中に調せらる。楊漣が魏忠賢を弾劾すると、それに同調して上疏する。そして崔呈秀の贈賄事件に連座して、戍邊処分とされる。閹党に好を通ずるよう勧められるが、拒否する。そして、趙南星が弾劾されると、官籍を剥奪されて、貴州に流される。崇禎元年(一六二八)に魏忠賢の閹党が実権を失うと、南京通政參議に再登用され、太僕少卿に遷る。崇禎五(一六三二)年二月に右僉都御史に擢せられて、熊文燦(貴州永寧衛。萬曆三十五年丁未科(一六〇七)三甲七十四名の進士。崇禎元年三月一日～崇禎五年二月二十五日福建巡撫在任。崇禎五年二月二十五日～十年閏四月四日兩廣總督在任)に代わって福建巡撫(崇禎五年三月七日～崇禎八年十月十九日在任)となる。そして、海賊の劉香を滅ぼす。また、かなりの犠牲を払って外国の干渉を打ち払う。『明史稿』は、それ以後のことを、つぎのようにいう。

〔鄒〕維璉、事(福建巡撫)に在ること二年、勞績、甚だ著わる。會たま當國する者の溫體仁<sup>もとよ</sup>の輩、雅より〔鄒〕維璉<sup>じく</sup>を忌む。而して閩人の京師に宦する者の朝に騰謗(ほしいままに誹謗する)あり。竟に<sup>これ</sup>是に坐して罷官(罷免)さる。〔崇禎〕八年(一六三五)春、賊を却けるの功を叙せられ、詔もて許され起用さる。旋いで召されて兵部右侍郎を拜す。〔ところが〕、遽疾(病となり)となり赴かず、家に卒す(『明史稿』卷二百四十一・列傳第一百三十六・「鄒維璉」条・十五葉：『明史』卷二百三十五・列傳第一百二十三・「鄒維璉」条も同文)。

たいへんな功績があつたが、時の権力者の溫體仁と折り合いが悪く罷免される。崇禎八年に再起用されるが、病気のため出仕できず、亡くなった、という。



[崇禎五年九月] 甲寅（十九日）、遣御史の王萬象を巡按江西、路振飛を巡按福建とし、劉之鳳を陞して光祿寺少卿と為し、傅朝佑を戸科右給事中と為し、阮震亨を禮科右給事中と為さしむ（『崇禎長編』卷之六十三・「崇禎五年九月甲寅（十九日）」条）。

### ①建安縣知縣の徐汝驊

建安縣知縣の徐汝驊（崇禎元年戊辰科（一六二八）三甲二百六名の進士）の処分についてであるが、康熙『建安縣志』（卷之四・職官・知縣・明・十一葉）には、「[安徽] 宣城の人。進士」とあり崇禎年間に任ぜられたとするだけである。また、出身地の嘉慶『宣城縣志』卷之十三・選舉・進士・「徐汝驊」条・十一葉には、

徐汝驊 字は雲達、[萬曆戊辰進士で番禺縣知縣の徐] 大望（萬曆二十六年戊戌科（一五九八）三甲七十名の進士）の子。建安知縣に任ぜらる（康熙『建安縣志』卷之四・職官・知縣・明・十一葉）。

とあるのみで何も記されていない。

### ②海賊の劉香

『明季北略』には、劉香（劉香老）の討伐について、つぎのように記される。

初め、[鄭] 芝龍 海盜爲り。天啓七年（一六二七）、閩（福建）中の銅山・中左等の處に犯る。<sup>せめい</sup>崇禎元年（一六二八）五月に之を招けば、九月に[鄭] 芝龍 巡撫の熊文燦（崇禎元年三月～崇禎五年二月在任）に降り、授くるに游撃を以てす。[崇禎] 五年壬申十一月、劉香老（劉香）福建の小埕に犯る（『崇禎實錄』卷之五・『國權』卷九十二によれば「崇禎五年春十月庚辰（十六日）：西曆一六三二年十一月二十七日」）。[鄭] 芝龍 之を撃走す。[崇禎] 六年、海盜劉香老 長樂に犯る。<sup>せめい</sup>甲戌（崇禎七年：一六三四年）四月、又た海豐を寇（侵略）す（『崇禎實錄』卷之七によれば「崇禎七年四月朔：西曆一六三四年五月三日」）。乙亥（崇禎八年：一六三五年）四月、[鄭] 芝龍 粵兵を合わせて劉香老を田尾遠洋（廣東碣石衛の沖合）に撃つ（『崇禎實錄』卷之八によれば「崇禎八年春四月丁亥（八日）：西曆一六三五

6) 『南疆逸史』（卷五十三・列傳第四十九・武臣・「黃斌卿」条）によると、黃斌卿は興化衛の人で、小字（乳名）は「虎癡」といい、智術があり、文墨（文章）に通じ、談論を善くしたという。丞北方となっていた父親が流賊に害せられたため、恩例で把總を授けられる。舟山參將となり江北總兵にまでなる。福王政權が亡びると、隆武帝に千金を進めて、肅虜伯に封ぜられ舟山に駐屯する。魯王が逃げ込んでくると、保護しなかった。また、その二人の王子がやってくると、海に沈めて、財宝をわがものとした。最後には、殘明政權の將軍たちによって滅ぼされる。

溫睿臨は『南疆逸史』の論贊で、こうした黃斌卿についてつぎのように言う。

逸史 曰く、…「不忠・不義・不仁・無禮・不智である黃斌卿は」、無道の甚しきなり。夷滅（誅殺）さるるも亦た宜ならずや。諸の若き人は、本とより錄せざるに足るも、其の事を傳え以て世の戒と爲すのみ（『南疆逸史』卷五十三・列傳第四十九・武臣・「黃斌卿」条）。

年五月二十三日))。[劉] 香老 兵備道の洪雲蒸を脇ばさみ出船し兵を止めんとす。[洪] 雲蒸 大いに呼びて曰く、「我 矢死(死を<sup>ちか</sup>矢い)て報國せんとす。<sup>すみや</sup>亟かに撃ちて失うこと勿れ」と。遂に遇害さる。香老 勢蹙まり、自焚して溺死す……(卷之十一・「鄭芝龍撃劉香老」条)。

はじめ鄭芝龍は海賊であった。天啓七年(一六二七)に閩(福建)の銅山・中左などに攻め込んだ。崇禎元年(一六二八)五月に帰順を呼び掛けたところ、九月に投降して游撃の職を授けられた。崇禎五年十一月に劉香が福建の小埕に攻め込んだが、鄭芝龍が撃退した。崇禎六年には劉香が長樂に攻め入った。崇禎七年四月に福建の海豐を侵略した。崇禎八年四月に鄭芝龍は廣東の軍勢とともに劉香を田尾遠洋(廣東碣石衛の沖合)に攻撃した。劉香は帰順を呼び掛けに来て捕虜にした兵備道の洪雲蒸を盾にして船を出し、鄭芝龍の軍勢を止めようとした。すると、捕虜となり盾とされた洪雲蒸が「私は死を誓って国に報いようとしている。すぐに攻撃して逃げられることがないように」と大声でさけび、とうとう殺害された。劉香は極まってしまい、自焚して溺死した、という。

『崇禎實錄』には、

〔崇禎八年春四月〕丁亥(八日)、〔鄭〕芝龍 兵を合わせて劉香を田尾遠洋(廣東碣石衛の沖合)に撃つ。〔劉〕香 兵備道の洪雲蒸を脅して船を出し、兵を止めんとす。〔洪〕雲蒸 大いに呼びて曰く、「我 矢死(死を<sup>ちか</sup>矢い)て報國せんとす。<sup>すみや</sup>亟かに撃ちて失うこと勿れ」と。遂に遇害さる。〔劉〕香 勢蹙まり、自焚して溺死す(『崇禎實錄』卷之八・「崇禎八年春四月丁亥(八日)」条)。

とある。『國權』の「崇禎八年春四月丁亥(八日)」条では、兩廣總督の熊文燦(貴州永寧衛。萬曆三十五年丁未科(一六〇七)三甲七十四名の進士。崇禎元年三月～崇禎五年二月福建巡撫。崇禎五年二月～十年閏四月兩廣總督)の上奏として、ほぼ同じ内容を伝える。

〔崇禎八年春四月〕丁亥(八日)、總督兩廣の熊文燦 奏するに、「福建游撃鄭芝龍 廣〔東の〕兵を合わせて劉香を田尾遠洋(廣東碣石衛の沖合)に撃つ。〔劉〕香 〔投降を呼び掛けにきて捕虜にした〕兵備道の洪雲蒸を脅して船を出し、兵を止めんとす。〔洪〕雲蒸 大いに呼びて曰く、「我 矢死(死を<sup>ちか</sup>矢い)て報國せんとす。<sup>すみや</sup>亟かに撃ちて失うこと勿れ」と。遂に遇害さる。〔劉〕香 勢蹙まり、自焚して溺る。〔投降を呼び掛けて捕虜になった〕巡道の康承祖と參將の夏之木・張一傑は脱するを得」と(『國權』卷九十四・乙亥崇禎八年・「崇禎八年春四月丁亥(八日)」条・五七〇一頁)。

福建道監察御史の路振飛と福建巡撫の鄒維璉とは、崇禎八年春四月八日の劉香の鎮圧作戦に職務上かかわったと考えられるが、具体的に「鄭芝龍・黃斌卿等を調度(派遣)し之を撃たしめた」という記載は、いまのところ見当たらない。ただし、『崇禎長編』卷之六十五・「崇禎五年十一月甲寅(二十日)」条に、浙江巡撫の羅汝元(江西南昌の人。萬曆四十一年癸丑科(一六一三)三甲一百二十二名の進士：崇禎五年一月十日から崇禎六年八月十二日まで浙江巡撫)が、

劉香老などの討伐に浙江巡撫だけでは対策ができる範囲が限定されるため、福建巡撫の鄒維璉から鄭芝龍に協力するように命じてほしいという奏上に対しての崇禎帝の答批の中に、

帝（崇禎帝）謂う「海寇 未だ靖からず。已に屢しば旨もて 勦するを命ず。〔巡撫浙江右僉都御史の羅〕汝元（崇禎五年一月十日～崇禎六年八月十二日：浙江巡撫在任）は當に速やかに殲滅を行なえ。其れ福建巡撫の鄒維璉も亦た兵を發して會勦せしめよ。請う所の留餉は一并に酌覆（斟酌して調べる）せよ」と（『崇禎長編』卷之六十五・「崇禎五年十一月甲寅（二十日）」条）。

とある。福建巡撫の鄒維璉にも兵を發して掃討せよと命じていることからすると、鄒維璉については、劉香の討伐に関わっていた、といえる。

なお、劉香の船団について、陳仁錫の「浙寇新防議一」には、誇張もあるかと推測されるが、壬申（崇禎五年：一六三二年）七月、劉香老 廣東の極大の船を具有し、毎船に紅夷大銃十餘枚あり。大小の船三百餘號 之に總る<sup>あつま</sup>……（崇禎六年刻本『陳太史無夢園初集』車集二・防禦・「浙寇新防議一」・二十九葉）。

という。広東製の巨大船を備え、それぞれに西洋大砲十砲あまりが載せられていた。大小の三百余りの船がそこに集まっているという。

#### （4）巡按蘇松等處監察御史

歸莊の「左柱國光祿大夫太子太師吏部尚書兼兵部尚書武英殿大學士路文貞公行狀」は、巡按蘇松等處監察御史の時の路振飛をつぎのように伝える。

〔巡按蘇松等處監察御史として〕吳を按ずるの時、賦役の弊五事を上言す。〔その五事とは〕、一に「布解」、一に「白糧（宮中や官員のために江南から送られる白米）」、一に「漕兌（漕料（税料）の官民間の受渡し）」、一に「收糧」、一に「差役（徭役）」なり。皆な民 之を隱（隱蔽）するの甚しき者にして、一一法を設け、以て便利（有利）に従わしむ。又た 贖<sup>しよく</sup> 贖<sup>かん</sup> 贖（贖罪の銀錢）を省き以て敵臺（城牆上の防禦用の樓臺）を築き、義塚を置き、以て火葬を禁じ、豪暴（凶暴な権力者）の罪を正し、以て烈婦の冤を雪ぐ。大抵の須らく上請（上級の部署に対して申し出る）すべき者は、盡言（直言）し入りて告ぐ。專斷（獨自在決斷）す可き者は、立法施行す。吳の民 今に至るも之を徳とす。會たま常熟の奸民の張漢儒 政府の主使（教唆）を受け、伏闕（皇帝に直接上奏する）して郷官の錢謙益・瞿式耜を訐奏（告訐上奏）す。上（崇禎帝）按撫に命じて二臣を逮（逮捕）す。公（路振飛）上疏して其の誣なるを白す。執政（溫體仁）擬旨して切責（厳しく叱責する）し、降三級とす。復命するに及び、遂に臬幕<sup>げつ</sup>の謫（河南按察司檢校（按察使の補佐官）へ左遷）有り。已にして里居す。久之（ひさしくして）、復た清署<sup>①</sup>（事務が煩瑣ではないが重んぜられる官署：光祿寺少卿のことか）に迴翔（復歸）す（上海古籍出版社『歸莊集』卷八・「左柱國光祿大夫太

子太師吏部尚書兼兵部尚書武英殿大學士路文貞公行狀」)。

南直隸の監察御史(巡按蘇松等處監察御史)であった時には、賦役の弊害五事を提議した。その五事とは、「布解」・「白糧」・「糟兌」・「收糧」・「差役」についてであり、すべて民が「弊害に苦しんで」隠し立てするものであった。それに対して、ひとつひとつ法律を設けて人々に有利なようにした。また賠償金を節約して城壁の上に防禦用樓台を築き、義塚を設置し、火葬を禁止し、悪辣な有力者の不正を正し、烈婦の冤罪を晴らした。たいていの上級に提出すべき意見は、ありのまま報告した。自主的な判断を任されたものは、法律を作成して施工した。呉の人々は、今になってもそれらのことを称賛している。たまたま、常熟の奸民の張漢儒が権力者の指示を受けて、皇帝に直接上奏して郷官の錢謙益と瞿式耜とを無実の罪に落とそうとした。崇禎帝は、按撫に命じて錢謙益・瞿式耜を逮捕させた。公(路振飛)は奏上して、その冤罪であることを申し出た。執政官(溫體仁)は、皇帝の旨の下書きを書き、路振飛を叱責して降三級処分とした。路振飛が任地の江蘇から復命すると、河南按察司檢校(按察使の補佐官)へ左遷された。そうこうして故郷に帰った。久しくして清署(事務が煩瑣ではないが重んぜられる官署：光祿寺少卿のことか)に復歸した。

#### ①賦役の弊五事

いまのところ賦役の弊五事についての上奏文は見出しえない。ただ、應天巡撫であった張國維(字は玉筍。浙江東陽の人。明・萬曆二十二年(一五九四)～清・順治二年(一六四五)。天啓二年壬戌科(一六二二)三甲一百六十名の進士：崇禎七年～崇禎十三年在任)の『撫吳疏草』不分卷には、路振飛が張國維と合詞して具奏した上奏文が複数収められている。

なお、路振飛は、崇禎九年三月二十九日に巡按蘇松等處監察御史に任ぜられていた祁彪佳(崇禎三年三月～崇禎七年在任)に、使者を送っていろいろと質問している。

[崇禎九年三月]二十九日……午後、家に抵る、路皓月(路振飛)使者を以て相い問<sup>と</sup>い、且つ詢うに呉中の利弊を以てす。予(祁彪佳)爲めに詳しく告ぐるに、清訟・清賦・甦役・除惡の凡そ四款幾千餘言を以てす……(『祁忠敏公日記』第六冊・林居適筆・「崇禎九年三月二十九日」条・十一葉：民國二十六年(一九三七)紹興縣修志委員會校刊本による)。

祁彪佳は、「清訟(訴訟を公正にする)」・「清賦(賦役を公正にする)」・「甦役(労役を免除・緩和する)」・「除惡(悪人を排除する)」の四点を数千言にわたって伝えたという。

なお、『復社紀略』によると、路振飛のこうした「賦役の弊五事」についての上奏文は、溫體仁が対立する復社の領袖の張溥・張采を貶めるために路振飛を派遣して書かせたという。

兩張(張溥・張采)既に烏程(烏程は、溫體仁の出身地)と隙有り。烏程(溫體仁)[張]溥 在籍(郷里に居る)すと雖も、能く遙かに朝政を執るを深く慮る。乃ち腹黨をして呉の地に往き官せしめ、其の隙を伺いて之を中てんとす。又た聞く江南の縉紳 徭役を優免

され、徧<sup>あまね</sup>く小民を累（巻き添えにする）す。又た多く奴僕を縦（勝手にさせる）し、閭里（平民）を欺詐（だます）す・・・・因りて御史の路振飛を選びて蘇松巡按と爲し、之を圖らしむ・・・・（『復社紀略』上巻）。

復社の領袖の張溥・張采は、溫體仁と反目していた。溫體仁は、張溥が故郷の蘇州太倉に帰ってしまったというものの、遠くから政治を動かしていることを憂慮していた。そこで、自分の派閥の腹心のものを派遣して、その隙をついて攻撃しようとした。また、張溥の故郷の江南地域の郷紳たちは、徭役を免除され、その不足分をひろく小民に巻き添え転嫁している。また、奴僕を勝手にさせ、平民たちを騙した。そこで、溫體仁は、御史の路振飛を選んで巡按蘇松等處監察御史に任命し、張溥・張采やその党派の江南の縉紳たちを攻撃させようとした、という。こうして、御史の路振飛を選んで巡按蘇松等處監察御史に任命し、自分の考えを実行させたというのである。

江南に赴任した路振飛はその指示通りの疏文を提出してきた。それを見た溫體仁は、つぎのような票擬を書いたという。

〔溫〕體仁 〔路振飛の〕疏を見て、即ち手づから擬旨し、「這の奏の内の衙役・豪僕・惡棍は皆な民の害を爲す。即ち著して痛革嚴懲（厳しく処罪する）せしめん。如し徇（公示）を玩ぶの郷紳・庇縱する<sup>もの</sup>的有れば、路振飛 時ならずして名を指して参し來らしむ」とす（『復社紀略』上巻）。

溫體仁は、自分から票擬を書いて、「この上疏文に書かれているの中の衙役・豪僕・惡棍は皆な民の害となっている。嚴重に処罰せよ。もしもこの公示をもてあそぶ郷紳やかばいたてる者などがいれば、路振飛にすぐに名前を挙げて弾劾させる」とした、という。

この記述のよると、路振飛は溫體仁の派閥の人間であり、その意向を受けて行動したということになる。ただし、路振飛と溫體仁との関係について記した資料は、この『復社紀略』以外には見当たらず、よくわからない。

さらに言うと、『復社紀略』には、路振飛に続いて祁彪佳が巡按蘇松等處監察御史を引き継ぎ、溫體仁の意向を受けたと伝えている。

〔路〕振飛に任 滿ち、繼ぎて巡方と爲る者は、上虞の祁彪佳、浙局巨擘商等軒（周祚）の婿なり。輪<sup>かわ</sup>りて差（派遣）さる時、亦た密かに旨授有り・・・・（『復社紀略』上巻）。

しかし、祁彪佳は路振飛の前の崇禎三年三月から崇禎七年の間に巡按蘇松等處監察御史であった。また、溫體仁が内閣首輔であったのは崇禎六年六月から崇禎十年六月までである。つまり、祁彪佳は路振飛の後任ではなく前任であった。その上、祁彪佳が派遣される崇禎三年三月には、溫體仁は、まだ内閣大学士にも任命されていなかった（溫體仁が内閣大学士となるのは、崇禎三年六月）。どうも『復社紀略』の記述には混乱があるようだ。

## ②烈婦の冤罪

この「冤を雪<sup>そそ</sup>」いだのは張士柏の妻・呉江の陳氏のことを指しているのかと考えられる。陳氏について、崇禎『呉縣志』はつぎのように伝える。

烈婦、姓は陳氏、張士柏の妻、呉江の人。年二十四にして〔張〕士柏 死す。〔陳〕氏 女<sup>むすめ</sup>を攜<sup>たずさ</sup>えて守志（再婚しない）す。里豪の徐洪 其の姿を豔（みめよし）とし、之を娶らんことを謀る。〔張〕士柏の兄嫂 其の金を利とし、與に議し、合して夜に乗じて戸<sup>おしひら</sup>を排き、〔陳〕氏を擄<sup>とりこ</sup>とし去き、之を汚さんとす。〔陳氏は〕従わず、號呼（大声で叫ぶ）し徹天（天にもとどく）なり。戚有りて之を聞きて救い、父の家に還る。〔陳〕氏 憤りて縣に投ず。而れども〔徐〕洪 已に先に地を爲す。〔陳〕氏 愬<sup>うった</sup>えの納られず、遽かに拶指（指を拘束する刑具をはめられる）され獄に繋がれ、尋いで釋（釈放）さる。〔陳〕氏 益ます憤りて、松江府に奔赴し、巡按御史の路振飛に叩（拝謁）す。〔その時、陳氏は〕牒（訴状）を抱き、刃<sup>ふところ</sup>を懷にす。詞 未だ畢らず、遂に庭に刎（くびきる）す。松〔江府〕の紳の許譽卿（字公實。江蘇華亭の人。萬曆四十四年丙辰科（一六一六）三甲一百四十四名の進士）等 衾棺含斂（葬儀の準備を整える）を助く。邑紳の沈正宗（江蘇呉江の人。萬曆三十五年丁未科（一六〇七）二甲三十七名の進士）秉正（公正）に昌言（直言）す。〔路〕振飛 清議を采り、題旌（題額を下賜して表彰する）せんことを特疏し、徐洪并せて造謀の奸黨の徐義・庾虎を杖下に斃す。〔沈〕正宗 族衿の張劭・舉士の柏襄<sup>とも</sup>と偕に此に〔張士柏と陳氏とを千步廊に〕合葬す（崇禎『呉縣志』卷之二十八・塚墓・本朝・「陳烈婦墓、在西龍池之千步廊」条・四十一葉）。<sup>7)</sup>

烈婦である陳氏は、張士柏の妻で呉江の人である。二十四歳で夫の張士柏が亡くなる。陳氏は、娘を養育して再婚しなかった。呉江の有力者の徐洪が、陳氏の美しいのに目を付けて、娶ろうと謀った。張士柏の兄嫂は、お金に目がくらんで、共謀して、夜に家の門を開けて、陳氏を連れ去り、婚姻を迫った。陳氏は、従わず、大声で叫び、その声は天にもとどくほどであった。親族がその声を聞きて救い出し、実家の父のもとに帰った。陳氏は、憤って呉江縣の役所に訴えた。しかし、事前に徐洪が手を打っていた。そのため、陳氏は手首を拘束する刑具をはめられ獄に繋がられた。そうした上で釈放された。陳氏は、ますます憤って、上級の役所のある松江府に駆け込んで、巡按御史の路振飛に拝謁した。その時、陳氏は牒（訴状）を抱き、刃<sup>ふところ</sup>を懷にしていた。話が終わらないうちに、役所の庭（法廷）で自裁した。松江府の郷紳の許譽卿（字は公實。江蘇華亭の人。萬曆四十四年丙辰科（一六一六）三甲一百四十四名の進士）などは、葬儀の準備を整えることを援助した。呉江の郷紳の沈正宗（江蘇呉江の人。萬曆三十五年丁未科（一六〇七）二甲三十七名の進士）は、公正な立場から直言した。巡按御史の路振飛は、こうした地元の言論界の有力者の意見を採用し、題額を下賜して表彰するようにと特別に奏上した。そして、徐洪と謀をたくらんだ仲間の徐義・庾虎を処罰した。沈正宗と張士柏一族の秀才の張劭と舉人の柏襄とは一緒に、張士柏と陳氏とを千步廊に合葬した、という。

崇禎『吳縣志』によれば、路振飛は地元の郷紳たちの「清義」に押されて、陳氏の表彰を奏上したとするのである。

葉夢珠（字は濱江，号は梅亭。明末清初の江蘇上海の人）の『閩世編』になると、つぎのように伝える。

陳烈婦なる者は、松陵（江蘇吳江）の諸生の張士柏の妻なり。〔張〕士柏 死し、同里の富人の周洪 其の美（みめよし）を聞き、之を娶らんことを謀る。烈婦 大いに怒り、罵りて應ずる勿し。〔周〕洪 之を得んと欲し、其の家をして之を誘いて歸甯（里帰り）せしめ、中道に于いて刼去（拉致）す。烈婦 愈々怒り、周洪と格むこと三日夜 息めず、免れ歸るを得。則ち之を訟う。邑令の章日玠（<sup>アツ</sup> 玠）は則ち已に周洪の金を入れ、直（公正）に與（<sup>あず</sup>）からず。烈婦 憤りに勝えず、即ち令（章日玠）を罵る。令（章日玠）曰く、「爾が手能く人を格まんや」と。即ち其の指に桡（手に刑具をはめる）さる。時に巡按御史の路振飛 方に松江（<sup>みまわ</sup>）を按る。烈婦 松〔江〕に至り、御史（路振飛）に控訴す。既に訟牘を投じ、遂に自から階下に刺して立どころに死す。御史（路振飛）大いに驚き、其の尸を驗（<sup>しら</sup>）べれば則ち衣は皆な縫紉（裁縫）し、十指 俱に傷つく。訟牘を視て、具に狀を得。御史（路振飛）之を憐れみ、其の事を窮治（徹底的に取り調べる）せんと欲す。時に松〔江〕に無頼の諸生の某なる者有り。周洪の賄を入れ、昌言（大っぴらに公言して）して曰く、「陳氏周洪の家に居ること三日なり」と。御史（路振飛）亦た之に惑い、狐疑（躊躇する）して

- ✓ 7) 『啓禎記聞録』も崇禎『吳縣志』とほぼ同じ内容のことを伝えている。ただ、最後に吳江縣知縣の章日玠が突然亡くなったことを付け加えている。

吳江の烈婦陳氏なるは、張士柏の妻なり。年 甫（ちょうど）二十二にして夫（張士柏）卒す。止だ一幼女を遺すのみ。嗟々（ひとりぼっち）たる孤寡（寡婦）なり。夫（張士柏）の弟の〔張〕士松 貧にして無頼なり。嫂の少艾（若くて美しい）に因り、潜かに許嫁（結婚を約束）して徐公に與えて妾と爲さんとす。〔しかし〕婦（烈婦陳氏）知らざるなり。期に至り、先ず隣壚をして婦（烈婦陳氏）の家に投宿せしめ、更餘（二時間余り）にして、鼓樂 門に及び、隣壚 扉を啟け之を納る。婦（烈婦陳氏）抗する能わず、衆の爲に擁扶（手で支える）され舟に入り、徐家に至る。婦（烈婦陳氏）號泣して従わず。徐 變有るを知り、詭りて「僕の爲に婦（烈婦陳氏）を娶らんとす」と云う。婦（烈婦陳氏）愈々憤罵す。徐の族人の婦は、即ち烈婦の姪孫女なり。之を聞き、乃ち婦（烈婦陳氏）を伴い其の家に至り、天明に伊の父の陳俊處に送り歸す。〔烈婦陳氏の〕父 官に訟う。徐も亦た訟う。吳令の章日玠 誤り以て婦（烈婦陳氏）の服〔喪〕 未だ終わらずして嫁するを圖るとし、遂に之を獄に置く。〔徐氏とは〕離異（離婚）すと判〔決〕ありと雖も、婦（烈婦陳氏）の貞心〔に対する冤罪は〕不白（すすげなかった）なり。適たま本府の劉理刑 查盤して松陵（江蘇吳江）に至る。陳族の青衿 往きて訴え、乃ち保出を得。時に代巡の路振飛 松陵（江蘇吳江）を按臨す。婦（烈婦陳氏）先ず周身（全身）の衣を縫紉（<sup>ひそか</sup>）し、暗に利刃（<sup>かく</sup>）を藏し、入りて柏臺（御史臺）に訴う。已に准行（拝謁を許可する）さる。即ち刃を揮いて自から刺して斃る。代巡（路振飛）目撃して心傷み、銀十兩を發（<sup>おこ</sup>）りて殯殮（納棺と出棺）さす。吳江に行牌（公文書を発令）して、各々の犯を提し、責八十板として罪に抵（<sup>あ</sup>）つ。具疏題請し、旨を得て旌表（表彰）して祠を建てしむ。而して雲間の士夫 弔祭誄贈する者 市の如し。人 固より一死有るも、或いは千鈞より重しとは、烈婦の謂かと。章令（章日玠）一日 郡に入り、撫公に謁せんとす。甫（ちょうど）出で舟に登らんとするに、驟（<sup>にわか</sup>）に卒す。人 其れ暑に中ると謂うも、未だ何の故かを知らざるなり（『啓禎記聞録』卷二・「崇禎八年」条・一葉～二葉）。

未だ決せず。時に許光祿譽卿（許譽卿）里居す。其の事を聞き、書を御史（路振飛）に移して曰く、「陳氏 死を以て其の節を明らかにする者なり。天下 殉難（正義のために身を犠牲とする）の貪夫（貪欲な人物）無し。豈に守節の淫婦有らんや」と。而して孝廉の陳〔臥子〕子龍（陳子龍、字は臥子）・太學生の徐闇公孚遠（徐孚遠）諸生を帥いて文を爲り以て烈婦を祭る。文 甚だ美なり。諸生 日々譁し。御史（路振飛）之を聞き、遂に檄（布告）して周洪及び烈婦を誘う者數人を捕え、悉く笞死す。未だ幾ならずして吳江の令の〔章〕日玠（玠）上臺（上司）に謁し、將に門に入らんとするに、見る所有るが如し、遂に暴かに卒す。吳の民 是を以て烈婦を神とし、松〔江〕の士大夫を義とす。乃ち烈婦を蘇州虎邱寺の第二山門外の右に會葬す。墓は門の東向にありて、題して「吳江陳烈婦之墓」と曰う。門上の對聯に曰く、「身膏白刃風斯烈、骨葬青山草亦香（身もて白刃に膏して国は斯れ烈し、骨 青山に葬られて草 亦香る）」と。鼎革の後、余（葉夢珠）猶お之を見る。十餘年來 匾額及び對聯 俱に失われ、門上は又た改め題せらるる有り。誰が之を爲すかを知らざるなり、浩歎（大いに嘆く）を爲す可し（『閩世編』卷四・名節二）。<sup>8)</sup>

陳烈婦は、吳江の諸生の張士柏の妻である。張士柏が亡くなり、同郷の資産家の周洪は陳氏が美しいと聞き、娶ろうと謀った。陳氏は、たいへん怒り、罵って申し出に応じようとしなかった。しかし周洪は、自分のものにしようとし、陳氏の家人を使って誘い出して里帰りさせ、その道中で拉致した。陳氏は、ますます怒り、周洪を拒み続け、三昼夜になっても、やめなかった。そうして、免れて帰ることができた。そうしてこのことを訴え出た。吳江縣知縣の章日玠はもとより周洪の賄賂を受け取り、公正に取り扱わなかった。陳氏は、たいへん憤り、吳江縣知縣の章日玠を罵った。吳江縣知縣の章日玠は、「お前の手がうまく人様を拒んだのか」と述べ、その手に刑具をはめた。この時、巡按御史の路振飛が松江を見回っていた。陳氏は、御史

8) 談遷（原名は以訓，字は孺木・仲木，号は射父・觀若・容膝軒・江左遺民。浙江海寧の人。明・萬曆二十二年〔一五九四〕～清・順治十四年〔一六五七〕）の『棗林雜俎』には、張氏の娘をめぐるトラブルを原因としている。

吳江の諸生の張士柏、沙溪の陳俊の女を娶る。〔張〕士柏 夭し、遺女（遺された子供）三歳なり。其の兄の〔張〕士松 婦（烈婦張氏）の〔女の子を〕産するを利とし、郷人の徐洪の義子の張程を以て之に字（許嫁として婚約させる）するも、婦（烈婦張氏）聽かず。乙亥十二月既朔（崇禎八年十二月二日：西曆一六三六年一月九日）、羣党もて夜に突入し、婦（烈婦張氏）を脅して往く。〔婦（烈婦張氏）は〕死もて之を拒むも、克たず。〔張〕士柏の從孫の女 故より徐氏に適す、因りて家に迎う。越えて六日、陳（烈婦張氏）縣侯の德清〔出身の〕章日玠に訴えるも、〔章〕日玠 其の媒（なこうど）を杖うつ。徐義（徐洪）婦（烈婦張氏）の之を争うを以て、強いて其の指に刑す。拳 曲りて受けず。遂に〔婦（烈婦張氏）を〕囹圄（とら）う。婦（烈婦張氏）謂う、「徐洪の宅に在りて連夕（連夜にわたって）白（冤罪をすすぐ）す可きは無きなり」と。已に婦（烈婦張氏）獄を出で、忿ること甚だし。〔そして〕丙子（崇禎九年：一六三六年）三月に按臺（提刑按察司）に訴うるも、理めらるるを得ず。四月既朔、臬臺（都轉運司）に松江に訴う。臬臺（都轉運司） 吳江の令（吳江知縣の章日玠）に下さんと欲す。婦（烈婦張氏）迫るを計り、即ち自刎す。郡人 之を義とし、東禪寺の旁に厝（安置）して、道祭（道路わきで見送る）相い望む。〔章〕日玠 竟に憂死し、徐洪等 各々罪に伏す（『棗林雜俎』義集・彤管・「吳江張烈婦」条）。



(路振飛)に控訴しようとした。そして、訴状を提出し、役所の門の階段で自裁した。御史(路振飛)は、非常に驚き、その体を調べたら、衣服は縫い付けてあり、十指はすべて傷ついていた。御史(路振飛)は、訴状を見て、つぶさに状況を理解した。御史(路振飛)は憐れんで、徹底的に調査を行なおうとした。この時、松江にごろつきの諸生の某がいた。周洪の心づけを受け取り、「陳氏は、周洪の家に三日もいた」と大っぴらに公言した。御史(路振飛)は、また迷い始め、躊躇してどうするか決めることができなかった。この時、郷紳の許譽卿が故郷に滞在していた。このことを聞き、書簡を送り、「陳氏は、死をもってその節義を明らかにした。この天下に正義のために身を犠牲とする貪欲な人物はいない。どうして節義を守る淫婦がいるのだろうか」と言った。そして、舉人の陳子龍や太學生の徐孚遠などが秀才たちを引き連れて文章を作って陳氏をたたえた。その文章は、きわめてすぐれていた。秀才たちは、日々騒がしくなった。御史(路振飛)は、こうしたことを聞き及び、とうとう布告を出して、周洪と陳氏を誘い出した者数人を拘束し、すべて処罰した。しばらくたたないうちに、呉江縣知縣の章日烓は、上司に拝謁することになり、上司のいる役所の門に入ろうとして、何かを見たようになり、急に亡くなった。呉の人々は、この呉江縣知縣の章日烓のことから、陳氏を神とし、松江の読書人たちを義であるとした。そして、陳氏を蘇州の虎邱寺の第二山門の外右に集まって葬った。墓は門の東向にあって、「吳江陳烈婦之墓」と題してあった。對聯には、「身膏白刃風斯烈、骨葬青山草亦香(身もて白刃に膏<sup>あぶら</sup>して風は斯<sup>ごと</sup>れ烈<sup>はげ</sup>し、骨 青山に葬られて草 亦た香る)」とあった。明・清の王朝交代の後、私(葉夢珠)は、まだこの墓を見た。十数年が経過して、匾額と對聯はともに失われて、墓には改めて題字が書かれていた。誰が行なったのかわからない。おおきなため息を禁じ得ない。という。なお、陸肇域・任兆麟の『虎阜志』(乾隆五十七年(一七九二)鐫)には、陳氏およびその墓についての記載がない。おそらく、乾隆五十七年(一七九二)の時には陳氏の墓は見当たらなくなっていたと考えられる。

『閩世編』では、呉江縣知縣の章日烓は賄賂を受け取っていたために訴えは認められず、より上級の巡按蘇松等處監察御史の路振飛に死をもって控訴した。路振飛はだいたいを理解し、調査しようとした。しかし、無頼の諸生の某の運動で、また躊躇しだした。だが、地元の秀才たちが陳氏に味方する世論を形成したので、陳氏の立場からの処分を行なったという。路振飛は、自分から積極的に事件を処理したようには記されていない。

なお、貪官のように記載される呉江縣知縣の章日烓(崇禎七年甲戌科(一六三四)三甲五十二名の進士:崇禎七年~崇禎十年在任)については、呉江の潘樸章(字は聖木、一字は力田。潘志伊の曾孫。潘耒の兄。明・崇禎元年〔一六二八〕~清・康熙二年〔一六六二〕)の『松陵文獻』に異なった意見が紹介されている。

章日烓、字敬明、[浙江] 德清の人。少して孤なり。伯父の通政使[章]<sup>①</sup>嘉楨に育てられれば、即ち理學・名節を以て相い摩切(切磋琢磨)す。既にして郷薦に擧げらるる(會試を受験すること五たびなるも上不第(合格できなかった)。郡郭(郊野)に賃居し、授徒し

て母を養い、足跡 罕に至る。公府（役所）識ると識らざと皆な稱して眞の孝廉なりと爲すと云う。崇禎四年、署武進教諭たり。餽遺（贈與）<sup>しりぞ</sup>を却け、訴訟を絶ち、其の賞識（すぐれた人物として選抜する）する所は知名の士 多し。〔崇禎〕七年、進士に擧げられ、吳江に知たり・・・・（康熙三十二年（一六九三）刻『松陵文獻』獻集・第十五卷・官師志三・明・「章日烱」条・八葉～九葉）。

①章嘉楨、字は元禮。浙江德清の人。萬曆八年庚辰科（一五八〇）の三甲一百八十七名の進士。『東林列傳』卷十四・「章嘉楨」条によると、「先生は、東林の赤幟（領袖）なり」という。

章日烱、字は敬明で、浙江德清の人である。若い時に父を失い、伯父の章嘉楨に育てられたので、理學・名節を学びはげんだ。そうして、會試を受験すること五回におよんだが、合格できなかった。章日烱は、縣城の郊外の住宅を借り、授業して母を養い、縣城に入ることはまれであった。役所の人たちは、章日烱を知っているいまいにかかわらず、皆なほんとうの舉人であると言いつつ。崇禎四年に署の江蘇武進縣の教諭に任命された。任地では、贈答を受け取らず、訴訟を行なう風潮を断ち切り、選抜する人たちは知名の者が多かった。崇禎七年甲戌科（一六三四）で三甲五十二名の進士となり、江蘇吳江縣の知縣となった。

こうして、吳江でさまざまな善政を行なった。ところが、ある舉人を取り締まり、また陳氏の事件が起こり、この地域の読書人たちに批判されるようになる。

・・・痛く豪強を抑う。盜魁の一孝廉の家に竄入（かくまわれる）有り、立ちどころに之を捕殺す。遂に孝廉の切齒（怒りや憎しみで歯ざしりする）する所と爲る。〔崇禎〕九年夏、陳婦の事 起り、松江の士大夫 閔然（さわがしい）と咎を主者（担当者）に歸し、御史に嗾（けしかけ）て疏糾さす。而して邑中の不肖の紳と孝廉とは、又た比して前隙を修めんとし、蜚語もて流傳す。〔章〕日烱 一の辨ずる所無く、惟だ力めて去るを求む。胥江（蘇州城西）の舟次に、暍（暑気あたり）に中りて卒す。年五十有四なり。其の後、〔四川〕達州の唐階泰 代りて〔知〕縣と爲り、嘗て其の誣なるを痛む。爲めに上書して兩臺（布政使と提刑按察使）に訟う。識者 之を臚<sup>よ</sup>しとす。〔唐〕階泰 字は瞿瞿、崇禎十年の進士なり（崇禎十年丁丑科（一六三七）三甲四十八名の進士）。令と爲り、亦た聲有り。仕えて禮部員外に至る。亂後、吳江に寓し卒す（『松陵文獻』獻集・第十五卷・官師志三・明・「章日烱」条・十葉）。

章日烱は、ひどく地元の権勢家を抑圧した。盜賊の巨魁がある舉人の家にかくまわれていることがあり、たちどころにそれを捕らえて処罰した。とうとうその舉人を口惜しがらせることになった。崇禎九年夏に、陳氏の事件が起こり、松江の士大夫たちは、騒いでその過ちを担当者である章日烱に着せ、御史の路振飛にけしかけて弾劾文を奏上させた。そして、吳江の品行の良くない郷紳や先の切齒した舉人とは、一緒になって先のうらみを晴らそうとして、デマを流し伝えた。章日烱は、一言の言い訳もせず、ただ引退することだけを求めた。蘇州城西の胥江の船中において暑気あたりで亡くなった。五十四歳であった。その後、四川達州の唐階泰が、

次の呉江縣知縣となり、章日烓が誣告されたことを残念に思い、兩臺（布政使と提刑按察使）に上奏した。識者は、それをいいことだとした。この唐階泰〔字は瞿瞿〕は、崇禎十年丁丑科（一六三七）三甲四十八名の進士である。呉江の知縣となって評価された。そして、禮部員外にまでなった。明末清初の混乱の後、呉江に住み、そこで亡くなった、という。

潘樸章は、この章日烓の「紀實」の最後につぎのようなコメントを附している。

外孫の〔潘〕樸章 曰く、……獨り是れ陳婦の獄のみは、外大父 此れを以て「横に口語を被る」<sup>①</sup>とす。而して其の原は皆な公（章日烓）の浙人爲るに因る。又た烏程相君（溫體仁）の取る所の士なれば、輒ち從いて之を排擠（失脚）さす。豈れ公（章日烓）の志節（抱負と氣節）皦然（明らかである）なるを知らん。烏程（溫體仁）の門に出づと雖も、固より落落として相い合わず（互いに相入れない）。陳婦 既に「烈」の名を以て詩謠ありて吳會（蘇州）<sup>あまね</sup>に徧し。而れども吾が邑の閭巷（民間）の口 頗る異辭有り。吳先生允夏「紀實」一篇有りて、最も詳覈（詳細で確實）と爲す。今、之を附録し、以て論定（後の評価）を俟つ、云<sup>しか</sup>いう（『松陵文獻』獻集・第十五卷・官師志三・明・「章日烓」条・十葉～十一葉）。

①漢・楊惲「報孫會宗書」（『文選』卷四十一所収）に「懷祿貪勢，不能自退，遂遭變故，横被口語（祿を懷<sup>いだ</sup>き勢<sup>むさば</sup>いを貪り，自から退く能わず，遂に變故に遭い，横に口語を被る）：厚祿にしがみついて権力をむさばり，身を退くことができず，そのために変事に出くわし，ひどくそしりを受ける」。

②吳允夏，字は去盈。明末の太學生。吳秀（隆慶五年辛未科（一五七一）二甲四十八名の進士）の曾孫である。：『松陵文獻』（獻集・第八卷・人物志八・孝義・明・「吳允夏」条・二十六葉～二十七葉）による。

私（潘樸章）は、外祖父（潘志伊）から、陳婦の獄について、「章日烓はひどくそしられた」と聞いた。そしてその原因は、すべて公（章日烓）が浙江出身の人であったからだという。そのうえ、烏程相君（溫體仁）によって拔擢された官員なので、それによって失脚させられたのだそう。そもそも公（章日烓）の抱負と氣節が明らかではっきりしていることを知らないのであらう。烏程（溫體仁）の門下生であるといっても、もともと互いに相入れないものがあつた。陳婦が「烈婦」の名づけられて歌にうたわれるようになり、それが蘇州一帯にあまねく広がった。ところが、私の呉江の民間の言い伝えは、たいそう異なっている。吳允夏先生は、章日烓の「紀實」を書いて、最も詳細で確實である。いま、この『松陵文獻』に収めておき、後世の評価を待ちたい、という。

潘樸章は、このようなコメントを述べて、呉江縣知縣の章日烓に対する非難は、当時の実力者の溫體仁の派閥とその反対派との党争がかかわっていることを示唆しようとしているようである。すると、路振飛の陳氏に対する対応がなかなか決まらず、地元の読書人たちの動向がはっきりしてから決定したのも、中央政府における党派の争いが影響しているのかもしれない。

また、巡按蘇松等處監察御史として路振飛は何人かの女性を烈婦として顕彰している。遺漏はあると思うが、それはつぎのような人たちである。

◎王氏 馮福謙妻，太平縣令王存理女，戸部馮體乾子婦也（康熙『金壇縣志』卷之十・人物志二・列女・明・「王氏」条・五葉による）。

◎李天德妻丁氏（康熙『常熟縣志』卷之二十二・列女・明・「李天德妻丁氏」条・三十一葉による）。

◎吳文暉妻姚氏（康熙『常熟縣志』卷之二十二・列女・明・「李天德妻丁氏」条・三十二葉による）。

◎翁氏許明臣妻也（崇禎『吳縣志』卷之五十二・人物<sup>十七</sup> 列女・本朝・「翁氏許明臣妻」条・四十三葉による）。

◎儒生鄒承恩妻張氏（嘉慶『松江府志』卷六十四・列女傳・明・華亭縣・「儒生鄒承恩妻張氏」条・十葉による）。

### ③錢謙益と瞿式耜と

崇禎十年，常熟的張漢儒が錢謙益（字は受之，号は牧齋，後に牧翁・蒙叟・絳雲老人・敬他老人・東澗老人。江南常熟の人。明・萬曆十年（一五八二）～清・康熙三年（一六六四）。萬曆三十八年庚戌科（一六一〇）一甲三名の進士〔探花〕と瞿式耜（字は起田，号は槐林・耘野・稼軒・耕石齋・槐林居士。蘇州常熟の人。明・萬曆十八年（一五九〇）～清・順治七年（一六五〇）。萬曆四十四年丙辰科（一六一六）三甲一百九十七名の進士）が，地元で不法行為を行っていることを告発する。これは，崇禎元年に失脚し，故郷の常熟で逼塞していた錢謙益にさらなる打撃を与えるために，溫體仁（字は長卿，号は圓嶠，諡は文忠（福王政権の時に諡は取り消される）。浙江烏程の人。萬曆二十六年戊戌科（一五九八）二甲四十三名の進士）が，張漢儒を利用して引き起こしたとされる。

『明季北略』は，この事件をつぎのように伝える。

〔崇禎十年〕正月，常熟縣の民の張從儒<sup>ママ</sup>（張漢儒）前の禮部右侍郎の錢謙益・科臣（科道官）の瞿式耜を訐奏（中傷の上奏を行なう）して，謂う「二臣は喜怒もて人才の進退の權を操り，賄賂もて江南の死生の柄を握る。三黨九族 不許の人無く，興販・通番 爲さざるの事無し。甚だしくは國帑（公金）を侵（横領）し，朝廷を謗り，社稷を危くす。止だ門生・故舊の要津に列するに因り，鳴冤（無実を訴える）するも地無し。宦幹豪奴（強くて狡猾な奴僕）道路に滿ち，洩忿（心の憤懣を晴らすこと）は，何に従わん」と。奏上され，溫體仁 擬旨し，錢謙益・瞿式耜を逮（逮捕）して刑部の獄に下る。是より先，奸民の陳履謙 産を争いて，二宦に關説を求むるも，允されず，恨みを懷く。遂に〔張〕從儒<sup>ママ</sup>（張漢儒）を唆して訐奏さす。既にして奉けたる旨もて提問ありて，〔陳〕履謙等 志を得。遂に「欸曹，和溫」等の虚詞を捏造し，多方（多方面）嚇詐監（脅し騙す）す。「欸曹」とは，〔錢〕謙益 嘗て故の太監の王安の祠記を作る。曹化淳 王安の門に出で，宜しく之に欸（好みを通じる）すべきを謂う。「和溫」とは，溫〔體仁〕と〔錢〕謙益とは隙有り，宜

しく之に和すべきを謂う。曹化淳 之を訪知（探り出して知る）し、憤りて其の奸を發す。是に至り、刑部尚書の鄭三俊（直隸建德の人。萬曆二十六年戊辰科（一五九八）三甲六十二名の進士）真情を審出す。陳履謙・張從儒 各々一百棍を打ち、立枷三月にして死す。<sup>①</sup>  
 [錢] 謙益等 尋いで釋され歸る（『明季北略』卷之十三・「溫體仁擬旨逮錢瞿」条）。

①『福惠全書』卷十一・刑名部・「用刑」に、「立枷は、則ち枷 架上に懸けて、人の蹲り坐するを得ざらしむなり」。

崇禎十年正月に、常熟縣の張從儒（張漢儒）が前の禮部右侍郎の錢謙益と前の科道官の瞿式耜をそしり隠し事を暴いて奏上した。それによると、「錢謙益と瞿式耜とは、好き嫌いで人の評価を思い通りにし、賄賂で江南地域の生殺与奪をとりきめています。一族には偽りのない人物はおらず、商売で外国と取引することなどやりたい放題です。特に公金を横領し、朝廷のことを誹謗し、国家を危険な状態にしています。ところが、門下生や昔からの友人たちが要職を占めているため、無実を訴えようにも、どうしていいかわかりません。官員の手下や狡猾な奴僕などが路上に満ち溢れ、心の憤懣は、どのように晴らせばいいのでしょうか」という。この訴状が奏上されると、[錢謙益と仇敵の関係であった] 溫體仁は、皇帝の命令文を準備して、錢謙益・瞿式耜を逮捕して刑部の監獄に下した。これより前の事であるが、悪賢い陳履謙が資産を争って錢謙益と瞿式耜とに斡旋を求めたものの、受け付けられず、恨みをいだいた。そして、張從儒（張漢儒）をそそのかして、中傷し隠し事を暴いて奏上をさせたところ、崇禎帝の旨による質問があり、陳履謙たちは思いを遂げた。そうして、「欺曹」・「和溫」の虚偽の発言を作り、多方面を脅してペテンにかけた。「欺曹」とは、錢謙益が以前に宦官の王安の祠記を撰し、いまの宦官の実力者の曹化淳は、その王安の下僚から出ているので、そのコネを利用して、曹化淳に欺（好みを通じる）すべきである、ということを目指している。また、「和溫」とは、溫體仁と錢謙益とは仇敵であるので、溫體仁と仲直りすべきである、ということを目指している。宦官の実力者の曹化淳は、このことを探り出して知り、憤ってその欺瞞をはっきりさせた。そうした状況になり、刑部尚書の鄭三俊が真実を審査し、陳履謙と張從儒（張漢儒）とは、棍百叩き、立枷三月にして亡くなった。錢謙益たちは、続けて許されて帰ることができた、という。

この張漢儒の疏の中で、

……今、問杖回籍する錢謙益・原任戸科給事中の今削職され民と爲るの瞿式耜の兩人は、皆な明論〔割注：原と「倫」に作る〕を畏れず、清議を畏れずして、人の膏血を吸い國の正供（法定の賦税）を啖らう。朝政を把持（支配する）し、官評（官員の勤務評価）を濁亂（混亂）す。生殺の權は、之を朝廷に操らず、之を兩奸（錢謙益・瞿式耜）に操る。賦税の柄は、之を朝廷に操らず、之を兩奸（錢謙益・瞿式耜）に操る〔割注：一本「賦税」の下に十四字（「賦税之柄不操之朝廷而操之兩奸」）無し〕。[そのために] 蹙額（憂い悩む）窮困（困窮する）の民をして之を府縣に控<sup>うったえ</sup>んと欲せしむるを致す。而して府縣の賢否（勤務評価）は、兩奸（錢謙益・瞿式耜）且つ之を操る。[それは] 何となれば、撫按（巡撫と巡按御史）は皆な其の門生故舊

なればなり。之を司道に控えんと欲するも、司道の黜陟は、兩奸（錢謙益・瞿式耜）<sup>かつ</sup>之を操る。〔それは〕何となれば、滿朝〔割注：二字（「滿朝」）は一に「要津」に作る〕皆な其の私〔割注：一に「死」に作る〕黨羽翼なればなり。害を被る者は門無く控訴し、啣（銜）冤（冤罪を訴えるすべのないもの）の地無くして伸冤（冤罪を晴らそうとする）するに至る。處處に怨劫りて人人痛恨す……（『張漢儒疏稿』全一卷・一葉：民國六年（一九一七年）印『虞陽說苑』甲編所収）。

杖刑に問われ帰郷した錢謙益とともとの戸科給事中でいまは官職身分を剝奪され民となった瞿式耜の二人は、明らかな議論を畏れず、正しい議論も畏れず、人々の膏血を吸い、国家の決まった賦税をむさぼっています。また、朝政を操作し、官員の勤務評価を混乱させております。そのうえ。生成与奪の権は朝廷が握っているのではなく、兩奸（錢謙益・瞿式耜）が握っています。また、賦税の権は朝廷が握っているのではなく、兩奸（錢謙益・瞿式耜）が握っています。そのために憂い悩んで困窮した人々が府や縣に訴え出ようとしたと思うようになりました。ところが、その府や縣の官員の賢否（勤務評価）は、兩奸（錢謙益・瞿式耜）が尚且つ握っています。その理由として、巡撫と巡按御史はすべて錢謙益の門下生や昔からの友人たちです。このことを司法に訴えようとしても、司法の官員の升降は、兩奸（錢謙益・瞿式耜）が尚且つ握っているためです。その理由として、要職を占めているものがすべてそのため派閥や協力者だからです。害を受けたものは、つてもなく控訴します。また、冤罪を訴えるすべのないものは、どうしていいかわかりません。こうしてあちこちで恨みや脅迫があり、人々はひどく憤りを感じています、という。

この張漢儒の訴状が提出されると、路振飛はすぐに弁明の奏上を行なう。この地域の監察官として赴任していた路振飛にとって、張漢儒の奏上の内容が真実と認定されれば、職務怠慢となる。そのうえ、張漢儒の訴状に「門生・故舊の要津に列する」とある人物の一人となってしまふからである。

路振飛の弁明の疏文の「蘇松巡按御史路振飛爲「遵旨回奏」事」は、『張漢儒疏稿』（全一卷：民國六年（一九一七年）印『虞陽說苑』甲編所収）に収められている。それによると、つぎのようなものであった。

……伏して照らすに、臣（路振飛）の生まるるや<sup>おそ</sup>晩く、計るに辛未（崇禎四年：一六三一年）より朝班に列するを得。〔錢〕謙益の回籍するの日より已に三年なり。南北 遼絕（はるかに遠い）なれば、從來 一面（一度の面会）も謀らず。〔そのうえ〕、去春 邸報に接閲し前の按臣の王一鶚 復命（都に帰って成果報告）するを以て〔臣（路振飛）が〕薦舉さる。奉けたる嚴旨（聖旨）に隨い、維時（その時）、臣（路振飛）已に呉を按ず。〔その時、錢謙益の〕名實（評判と実際と）或いは未だ相い<sup>かな</sup>副わざると私意（自分で推測する）すれば、徐むるに相い晤うを俟ち、其の生平（普段のあり様）を核（調査する）せんと欲す。八月内に常熟を巡行し式廬（訪問して拜謁する）の禮を修むに迫ぶ。〔ところが、錢〕

謙益は、則ち母の爲に營葬（喪事を執り行う）し、躬から版築を虞山に負い、相い晉接（接見）せず。臣（路振飛）止だ其の門巷（門前）の湫隘（せまい）たりて廳事（部屋の建物）の蕭然（ひっそりしている）たるを視、心竊かに之を重（尊重）す。臣（路振飛）境に入るの日、南劉を懲しめるの往轍（前例）<sup>①</sup>もて、將に豪右（富豪や権勢家）を窮治（徹底的に調査する）し、以て地方を安んぜんと欲す。尤も豺（やまいぬ）を舍きて狸（やまねこ）を問うを恥ず。故に偏に軍民人等に示すに、果たして眞見・眞聞有れば、應に大奸・大惡を除くを興こすべし。〔そのために〕緣由（由来）を直書するを許し、放告（案件受理の告示）の通完（処理し終える）するを俟ち、面陳（直接に話す）し至る所の行道（道路）に張掛（掲示）し咸な知らせ告示す。現在、乃ち獨り〔錢〕謙益・〔瞿〕式耜を告ぐるの人無きのみならず、亦た其の家人を告ぐるの人有り無し。即ち張漢儒も亦た未だ嘗て片紙隻字の臣（路振飛）に投ずる有り無し。奉けたる旨もて士民を拏究（取り調べる）す。之が爲に冤を稱する者數千人にして、臣（路振飛）を叩くこと沸くが如し。夫れ前後の事情 此の如し。臣（路振飛）即ち強博（強いてひろくする）にして風烈（節操）あらんと欲す。何れの處に於いて之を禁じ。之を戢（とどめ）んや・・・・（『張漢儒疏稿』全一卷・「蘇松巡按御史路振飛爲「遵旨回奏」事」・六葉～七葉：民國六年（一九一七年）印『虞陽說苑』甲編所収）。

①崇禎五年に宜興縣の南劉・陽山で民變があり、崇禎六年に巡按の祁彪佳がその対策にあたったことを指すか。

伏して調べてみますに、臣（路振飛）は生まれたのは〔錢謙益より〕<sup>おそ</sup>晩く、計算しますと辛未（崇禎四年：一六三一年）より京官に列することになりました。錢謙益が帰郷してから、すでに三年が経過しております。北京と江南とがはるかに遠いので、これまで一度の面会すら考えたことはありません。そのうえ、去年の春に邸報を見て臣（路振飛）の前任の巡按の王一鶚が復命（都に帰って成果報告）したため、臣（路振飛）が後任に推薦され、拝受した聖旨に従い、江南地域を査察しました。その時、錢謙益の評判と実際とがいささか合致していないと感じたため、ゆっくりと面会する機会を待ち、そのつねづねを調査しようと考えました。そして八月に錢謙益の故郷の常熟を査察巡行することになり、訪問して拝謁する禮を行なうことになりました。ところが、錢謙益は母の喪事のために、みずから虞山で墓所の工事を行なうことになり、面会いたしませんでした。臣（路振飛）は、錢謙益の門前が大きくなく、部屋の建物もひっそりしているのを見て、心ひそかに錢謙益を尊重いたしました。臣（路振飛）が江南地域に赴任しました時は、崇禎五年の宜興縣の南劉・陽山で民變を鎮圧した前例に従い、富豪一族・権勢家一族などを徹底的に調べ上げて、地域を安定させよういたしました。そして、最も豺（やまいぬ）のような大物を置いておき、狸（やまねこ）のような小物を相手にすることを恥としました。そこで、ひたすら兵士や人々に実際に見たり聞いたりしたことであれば、大奸・大惡を取り除くことを率先して起こすべきだとしました。そのため、そのわけをはっきり書きだすことを許し、案件受理の告示を処理が完了するのを待って、直接に話し、至る所の道路に掲示し、すべて知らせ

告示するようにしました。それなのに、いま錢謙益・瞿式耜を告発する人はおりませんし、その家人を告発するものもありません。告発した張漢儒ですら、これまで片紙隻字を持ち込んできたことはありません。これまで、陛下のご命令を受けて、読書人や民を取り調べました。そのおかげで冤罪を申し立てる者が数千人もでてきて、湧き出るように臣（路振飛）に叩頭いたしました。臣（路振飛）が着任した前後の事情は、以上の通りです。臣（路振飛）は強いてひるく訴えを受け付け、自分で節操を保つようにと願いました。何れのところで訴えを禁止し、それを留めるようなことをしたのでしょうか、という。

路振飛は、巡按蘇松等處監察御史着任以前には錢謙益と面識がなく、着任後も錢謙益の家庭の事情で拝謁しなかったという。また、錢謙益の邸宅が質素なことを見て、ひそかに尊重したともいう。さらに、巡按蘇松等處監察御史として人々から冤罪の申し出を受け付けたものの、錢謙益・瞿式耜についての訴えはまったくなく、今回錢謙益・瞿式耜を告発した張漢儒ですら、一言も言ってこなかったという。そして、路振飛は、まったく訴訟を禁止したり、留めおくようなことはしなかったという。

こうした路振飛の弁明に対して、崇禎帝はつぎのような、批答（決裁事項）を書く。

〔崇禎〕十年五月十六日 具題さる。二十日に奉けたる聖旨に、「御史は奉けたる旨もて巡方し、一切の不公不法は即ち當に破情（情実を抜きにする）肅憲にして民の爲に害蠹を除くべし。〔なのに〕路振飛 輒ち「何れの處に禁じ<sup>とどめ</sup>敢ん」と稱す。顯かに「推諉（なすりつけ）」「蒙混（事実の詐称）」に屬す。風紀（風教綱紀）何れに在りや。姑く着して降三級とし、舊に照らして仍お回道を俟ち、嚴しく考核を加えん。該部院 知道せよ」と（『張漢儒疏稿』全一卷・「蘇松巡按御史路振飛爲「遵旨回奏」事」・七葉：民國六年（一九一七年）印『虞陽說苑』甲編所収）。

路振飛の疏文は崇禎十年五月十六日に提出された。崇禎帝が「御史というのは、命令を受けて地方を視察し、あらゆる不公不法には、情実を抜きにして肅憲（厳格で明らか）とし、民のために害虫を除く存在である。なのに、路振飛は「何れのところで訴えを禁止し、それを留めるようなことをしたのでしょうか」という。これはあきらかに「推諉（なすりつけ）」「蒙混（事実詐称）」にあたる。御史としての風教綱紀はどこにあるのだろうか。しばらく路振飛を降三級処分とし帰任を待って、きびしく調査追及を加えよ。当該部院は、このことを知りおけ」と批答したのである。

ここで、「降三級処分」と記されているので、おそらく錢謙益を擁護したとされるのはこの疏文であろう。ただし、路振飛は、自己弁護に重点をおき、間接的に錢謙益・瞿式耜は冤罪であると、申し立てているように考えられる。

しかし錢謙益は、路振飛が自分を擁護してくれたと理解していたようである。錢謙益は、つぎのようにいう。

〔路振飛は〕、出でて吾が郷に按たりて、抗疏して余（錢謙益）が爲に申雪（冤罪だと申し



立てる：申辯表白）し、大いに権倖（権力がある奸佞の人）に忤う（「贈涇陽張儀昭序」・『初學集』卷三十四）。

路振飛は、都から我が故郷の常熟に巡按となって赴任して、私（錢謙益）のために冤罪だと抗議の奏上をしてくれて、たいそう権力がある奸佞の人に逆らった、という。

## おわりに

崇禎年間の末に世の中がますます混乱する。そこで、降三級処分となり故郷に隠棲していた路振飛が起用され、崇禎十六年八月二日に鳳陽巡撫となり、崇禎十七年三月九日からは漕運総督を兼務することになる。そして崇禎十七年六月一日に辞職するまで、淮安の治安維持に尽力する。

歸莊の「左柱國光祿大夫太子太師吏部尚書兼兵部尚書武英殿大學士路文貞公行狀」は、つぎのようになっている。

……崇禎の季に迫り、東兵（清朝の軍）大いに塞に入り、三輔（京城附近地區）を躡り、齊・魯を掠（略奪）す、流寇 中原に横（横行）し、梁・楚の間、羣盜 充斥（充滿）す。淮安は、轉漕（糧餉運搬）の要路、神京の咽喉（要地）なり。賊 常に耽耽（欲深くつけねらう）として窺伺（身の程知らずに望む）す。天子（崇禎帝）以て憂いと爲す。素より公（路振飛）の才を知る。是に於いて督漕の命有り……（上海古籍出版社『歸莊集』卷八・「左柱國光祿大夫太子太師吏部尚書兼兵部尚書武英殿大學士路文貞公行狀」）。

崇禎年間の末になり、清朝の軍勢がおおきく内地に入り、北京周辺を蹂躪し、齊・魯の山東地域を略奪して回った。流寇は、中原に横行し、梁や楚の地域は、盜賊が満ち溢れた。淮安は、漕運の要地であり、都にとって重要な地である。賊は常に欲深くつけねらい、身の程知らずに手に入れたいと願っていた。崇禎帝は、そのことを憂えていた。そして、路振飛の才覚に目を付け、漕運総督の任命となった、というのである。

漕運総督としての路振飛は、稿を改めて考察するつもりであるが、淮安の治安維持で用いた手法は、(1)で検討した涇陽知縣時代の流賊を撃退した経験を生かして、それをさらに大々的に行なったものであろう。また、(2)・(3)・(4)で検討したように、路振飛は職務に忠実で不正に対して直言した。

こうしたことからすると、路振飛は、行政官としては、たいへん優れた人物であったいえる。ただ、政治家ではなかった。それは、別に検討するが、漕運総督であった路振飛のところに福王朱由崧が避難してきた時の決断からも理解できるのではないだろうか。この時、福王朱由崧を擁して南京に乗り込めば、福王擁立の立役者として福王政権の実力者になれた。また、実際にそのように勧める人たちがいた。それに対して、路振飛は、

……此の時勢を看るに、某（呂振飛）一たび動けば（福王を擁立して南京に向かう）

則ち淮安 守られず、天下の事 去れり。此の〔擁立の〕功 止だ開國の元勳に譲りて之に居らしむ……(『淮城日記』(崇禎十七年八月自跋) 全一卷・「崇禎十七年四月二十六日」条・八葉：光緒十二年(一八八六) 南清河王氏小方壺齋刊)。

と答える。政治家としての自己の栄達よりも、行政官として淮安の治安維持をあくまで優先したのである。

なお、路振飛の人となりについては、多分に諛墓の辞が含まれるかと思うが、つぎのように伝える。

公(路振飛)の貌 魁碩(威風堂々とする)、舉止 端方(落ち着きがあり)なり。經世の才を負い、常に范文正公(范仲淹)の「先憂後樂(先だちて憂い、後れて樂しむ)」(「岳陽樓記」)の志を懷く。居官(任官する)立朝(官員となる)すれば、廉勤(清廉で勤勉)剛正(剛直で正直)にして、「強禦を畏れず<sup>①</sup>(権勢のある人物をもおそれない)」。嘗て「燭奸指佞不黨不阿(奸を燭し佞を指し、黨せず阿らず)」の八字を勒し、之を佩ぶ。一心に國を爲め<sup>②</sup>、慷慨(惜しみなく)して任事(職務を執る)。觸忌(禁忌に触れる)遭讒(讒言される)し、身 危難を犯すに至るも、終に亦た悔やまず(上海古籍出版社『歸莊集』卷八・「左柱國光祿大夫太子太師吏部尚書兼兵部尚書武英殿大學士路文貞公行狀」)。

①『詩經』大雅・烝民に「不侮矜寡、不畏彊禦(矜寡(ひとり者のような弱い者)を侮らず、彊禦を畏れず)」。

②『論語』里仁「能以禮讓爲國乎、何有(能く禮讓を以て國を爲めんか、何か有らん)」。

路振飛の姿は、威風堂々として、振る舞いは落ち着きがあった。世を治める才能を担い、常に宋の范仲淹の「先憂後樂(先だちて憂い、後れて樂しむ)」の志を懷いていた。任官すると、清廉勤勉で剛直正直で、権勢のある人物をもおそれなかった。以前、「燭奸指佞不黨不阿(奸を燭し佞を指し、黨せず阿らず)」の八字を彫り、身に着けていた。政治を行なうに惜しみなく職務に励んだ。はばかりようなことに触れて、讒言され、身が危険にさらされても、悔いることはなかった、という。

これは、『淮城日記』で伝える漕運総督の路振飛の言行と重なり合うものがある。

## On the First Half of Lu Zhenfei's Life

Kunio TAKINO

### Abstract

This paper examines the first half of Lu Zhenfei's (1602–1645) life. As the director general of grain transport, Lu was active in protecting Huai'an in Jiangsu at the end of the Ming dynasty. The conclusion of the examination makes it clear that the policies he used as the director general to maintain the security of Huai'an had all been used prior to Lu taking on the role.